

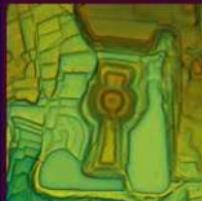
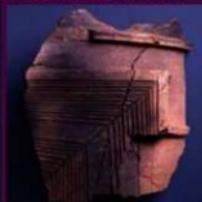
大和古墳群

山辺の古墳文化

柳本古墳群

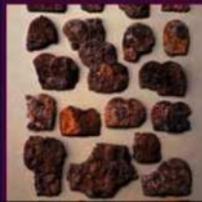
OYAMATO Tumulus Group & YANAGIMOTO Tumulus Group

と



2024

編集・発行
天理市教育委員会





山辺の古墳文化

大和古墳群と柳本古墳群

OYAMATO Tumulus Group & YANAGIMOTO Tumulus Group

2024

編集・発行
天理市教育委員会



〔例　　言〕

- 本書はなら歴史芸術文化村・天理市教育委員会が共催する令和5年度地域連携展「山辺の古墳文化 大和古墳群と柳本古墳群」にあわせて作成した解説書である。
- 本書作成にあたり下記機関・個人の協力を賜った。

関西大学博物館
京都国立博物館
京都大学文学部考古学研究室
宮内庁書陵部
公益財団法人藤田美術館
公益財団法人本間美術館
国立公文書館
桜井市教育委員会
奈良県立橿原考古学研究所
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
青柳泰介 有馬伸 石田由紀子 今井真由美 岩本崇
國井星太 下垣仁志 田中章夫 鶴見泰寿 西村知浩
古谷毅 水野敏典 宮川慎一 吉井秀夫 吉村和昭
- 本書は天理市教育委員会が編集・発行した。執筆・編集は石田大輔（天理市教育委員会文化財課）が担当した。
- 本書に掲載した古墳の多くは民有地等にあり、立ち入りには許可が必要となる場合がある。

■令和5年度地域連携展「山辺の古墳文化 大和古墳群と柳本古墳群」

□会期 令和6（2024）年1月20日（土）～3月3日（日）

□会場 なら歴史芸術文化村文化財修復・展示棟B1階展示室
(天理市仙之内町)

□主催 なら歴史芸術文化村・天理市教育委員会

□協力 京都国立博物館

京都大学文学部考古学研究室

奈良県立橿原考古学研究所

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館

〔表紙写真〕

- 下池山古墳 穹穴式石室 提供：奈良県立橿原考古学研究所
- 空から見た西殿塚古墳・鶴塚古墳 撮影：天理市教育委員会
- 中山大塚古墳くびれ部の墓石 提供：奈良県立橿原考古学研究所
- 東殿塚古墳埴輪に描かれた船 所蔵：天理市教育委員会
- 中山大塚古墳 穹穴式石室 提供：奈良県立橿原考古学研究所
- 空から見た下池山古墳 撮影：天理市教育委員会
- 空から見たノムギ古墳 撮影：天理市教育委員会
- 下池山古墳 内行花文鏡 提供：奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- 空から見た大和古墳群 撮影：天理市教育委員会
- 波多子塚古墳 塚輪 所蔵：天理市教育委員会
- 空から見た黒塚古墳 撮影：天理市教育委員会
- 黒塚古墳 三角縁草花帯四神四面鏡 提供：奈良県立橿原考古学研究所
- 黒塚古墳 北棺外の副葬品 提供：奈良県立橿原考古学研究所
- 空から見た浜吉山古墳 撮影：天理市教育委員会
- 大和天神山古墳 穹穴式石室 提供：奈良県立橿原考古学研究所
- 櫛山古墳 石製品と白壁 提供：奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- 空から見た行燈山古墳 撮影：天理市教育委員会
- 柳本立花遺跡 盾形埴輪 所蔵：天理市教育委員会
- 柳本古墳 地形起伏図 作成：天理市教育委員会
- 黒塚古墳 鉄製小札 提供：奈良県立橿原考古学研究所

〔表紙写真の配図〕

15	11	7	1
16	12		2
17	8 3		
18	13	9	4
19	5		
20	14	10	6

〔前写真〕

西殿塚古墳とその周辺 撮影：天理市教育委員会

行燈山古墳とその周辺 撮影：天理市教育委員会

〔裏表紙写真〕

東殿塚古墳出土埴輪 撮影：天理市教育委員会



001 龍王山から見た奈良盆地

龍王山からは奈良盆地の南半を一望できる
眼下に広がるのは著墓古墳と柳本古墳群

目

I 大和古墳群・柳本古墳群とは	1
奈良盆地東南部の前期古墳群	2
大和古墳群・柳本古墳群と周辺集落	8
コラム 大和古墳群・柳本古墳群 調査研究の歩み	10
II 大和古墳群とその周辺 11	
中山大塚古墳	12
西殿塚古墳	14
東殿塚古墳	16
燈籠山古墳	20
コラム 「ウブコ塚」「東良山」の考古資料	21
ノムギ古墳	22
ヒ工塚古墳	24
マバカ古墳	26
マバカ西古墳	27
波多子塚古墳	28
コラム 大和古墳群における前方後方墳	29
下池山古墳	30
馬口山古墳	32
乙木・佐保庄遺跡	33
成願寺遺跡	33
西ノ山古墳	34
五合瀬古墳	34
西山塚古墳	35

次

コラム 手白香皇女の墓	35
コラム 柳本飛行場と大和・柳本古墳群	36
III 柳本古墳群とその周辺 37	
黒塚古墳	38
大和天神山古墳	43
行燈山古墳	45
コラム 「崇神天皇陵」(行燈山古墳)の修陵事業	46
コラム 行燈山古墳の銅板	46
櫛山古墳	47
渋谷向山古墳	49
コラム 伝渋谷出土の石枕	50
コラム 伝渋谷出土の三角縁神獸鏡	50
コラム 「崇神天皇陵」と「景行天皇陵」	51
上の山古墳	52
コラム 京都大学考古学研究室保管の陵墓模型	53
シウロウ塚古墳	54
石名塚古墳	54
柳本大塚古墳	55
柳本遺跡	56
向山遺跡	56
柳本立花遺跡	57
参考文献・出典	
	58

002 「山辺の道」から見た大和古墳群

現在の山辺の道は古墳と古墳の間を繋うように走る。
中央は南から見た中山大塚古墳、右奥は西殿塚古墳。



Ⅰ 大和古墳群・柳本古墳群とは

「山辺の道」は奈良盆地東部の山麓を南北に走っていたとされる古道である。『日本書紀』や『古事記』が記す崇神天皇の陵「山邊道勾岡上陵」、景行天皇の陵「山邊道上陵」にその名を残す。古来の「山辺の道」が本当はどこを通っていたのかは今もなお解明が待たれる課題であるが、現在は東海自然歩道のうち石上神宮(天理市)から大神神社(桜井市)に至る道筋をとくに「山辺の道」(山の辺の道)と呼び、四季折々のハイキングコースとして多くの人々に親しまれている。

この山辺の道は、先に触れた崇神天皇陵(行燈山古墳)・景行天皇陵(渋谷向山古墳)のみならず数々の大小古墳の間を縫うように通っていて、歩きながら「山辺の古墳文化」を色濃く感じられるルートでもある。山辺の道沿いには約40基前後の前方後円墳・前方後方墳が集中し、まさに古墳時代前期随一といえる超大型古墳を形成している。古墳時代の開始とともに巨大古墳・大型古墳が次々と築かれた当地域は、初期ヤマト政権の成立過程の実像に迫るために最大の手がかりとして、たいへん重要視されてきた。

近年の発掘調査の進展や埴輪・副葬器物研究の進展により、個々の古墳の時期や性格、古墳群の階層構造の解明が大きく進んでいる。また、周辺の集落遺跡の調査でも、古墳群を造営した人々の集落に関する知見が蓄積されつつある。「山辺の古墳文化」に触れ、初期ヤマト政権を考える手がかりを探りたい。

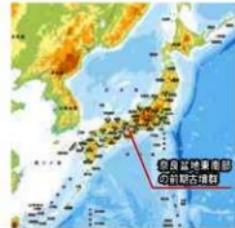
003 空から見た奈良盆地東南部の前期古墳群
大和古墳群・柳本古墳群・郷向古墳群を北から
望む。左方の山麓を山辺の道が通っている。



奈良盆地東南部の前期古墳群

奈良盆地東南部、三輪山・龍王山の西麓（現在の桜井市・天理市）には、古墳時代前期（3～4世紀）に6基の巨大前方後円墳が建築された。箸墓古墳（長さ280m）・桜井茶臼山古墳（195m）・西殿塚古墳（230m）・メスリ山古墳（224m）・行燈山古墳（242m）・渋谷向山古墳（300m）である。これらの巨大古墳を中心として、さらに大小の前方後円墳・前方後方墳や円墳などからなる超大型の古墳群が、初瀬川・寺川水系流域の南北約10kmほどの間に形成されている。同時期の日本列島でこれほどの規模の巨大古墳を建築し続けた地域はほかになく、日本列島最古にして最大規模の古墳群であるといえる。

この奈良盆地東南部の前期古墳群は「初期ヤマト政権（王権）」の墓地と考えられてきた。政権の権力構造や本拠地に関する議論は論者によってさまざまだが、日本列島に広く影響を及ぼした初期ヤマト政権を担う有力者の集団によって共立された歴代の「大王」の墳墓が、奈良盆地東南部につぎつぎと造営されたとする点では大方の理解は一致している。当地域の古墳群の動向は、まさに初期ヤマト政権の成立と伸長の過程を物語る。



004 大和古墳群と柳本古墳群の位置
大和川水系初瀬川の流域に位置する
大和古墳群と柳本古墳群。



005 繼向遺跡と継向古墳群

政権（王権）そのものの所在地と評価されている継向遺跡。



006 箸墓古墳

最初の巨大前方後円墳。長さ約280m。



007 奈良盆地東南部の前期古墳群周辺の地形

図は南北約 15km の範囲を示している。大和川水系の初瀬川・寺川の流域に 40 基前後の前期前方後円墳・前方後方墳が集中している。この超大型古墳群は、箸墓古墳を中心とする綾向古墳群、西殿塚古墳を盟主とする大和古墳群、行燈山古墳と渋谷

向山古墳が双璧をなす柳本古墳群の三つの大型古墳群からなる。また、南方の箸余地域の鳥見山の麓には桜井茶臼山古墳・メスリ山古墳といった 200 m 級の巨大古墳がある。さらに、北方にも西山古墳といった 200 m に迫る大型古墳が立地していることも見逃せない。

この奈良盆地東南部の前期古墳群のうち、本書では
天理市域の大和古墳群・柳本古墳群を取り上げる。

大和古墳群は天理市南部の佐保庄町・兵庫町・萱生町・新泉町・成願寺町・中山町・岸田町一帯に分布する古墳群で、西殿塚古墳を盟主とする。越川を北限、岸田川を南限とする南北幅約 1.5km の丘陵台地から扇状地に立地し、西方に鎮座する大和神社の宮郷である「大和郷」に重複して分布することからこの呼称がある。柳本古墳群は天理市柳本町・渋谷町一帯に分布する古墳群で、行燈山古墳と渋谷向山古墳の 2 基の巨大古墳を含む。眞面堂川を北限、鳥田川が南限となり、中央に西門川が流れ地形を二分している。

ところで、天理市の**大和古墳群・柳本古墳群**と桜井市**の綾向古墳群**は相互に有機的につながっており、包括的に総称されることも多い。おおよまと古墳群、オオヤマト古墳群、(広義の) 大和古墳群、山辺・磯城古墳群など、これまでにさまざまな表記が提案されている。「おおよまと」という名称は、奈良盆地東南部－初瀬川・寺川流域の農業生産力を背景とする地域集団を育んだ歴史的空間－を指す言葉として名付けられたものである。

いずれの名を用いるにせよ、この地域の古墳群の動向を一つ一つひもといていくことが、初期ヤマト政権の実像を描くうえで重要な手がかりとなるのである。



008 西殿塚古墳

長さ約 230 m は大和古墳群で最大である。



009 行燈山古墳

長さ約 242 m。



010 渋谷向山古墳

長さ約 300 m。柳本古墳群で最大。



011 奈良盆地東南部の古墳分布図

奈良盆地東南部の山麓一帯には古墳時代前期の超大型古墳群が広がっている。さらに周辺には中期・後期・終末期の中大小古墳も多数分布している。



013 戦後間もない時期の大和・柳本古墳群

昭和22(1947)年古い町が撮影した空中写真。西海岸の大和
古墳群を支える前の大和天神山古墳が見える。西海岸の大和
古墳群の基地であった柳本飛行場と同陸路駆逐群も写って
いる。飛行場の運営古墳群は大きな影響を及ぼした。

小平坊塚古墳

西山古墳

袖之内古墳群

柳本飛行場跡

大和古墳群

ノムキ古墳

仁工塚古墳

マハラ古墳

達多子塚古墳

西山古墳

下池山古墳

東園塚古墳

西路塚古墳

中山大塚古墳

高塚古墳

柳本駅

高塚古墳

柳本駅

高塚古墳

大和天神山古墳

行燈山古墳

柳山古墳

柳本古墳群

石名塚古墳

土の山古墳

シロコ塚古墳

赤谷向山古墳

豊山古墳

長塚古墳

細内石塚古墳

喜山古墳

原田大塚古墳

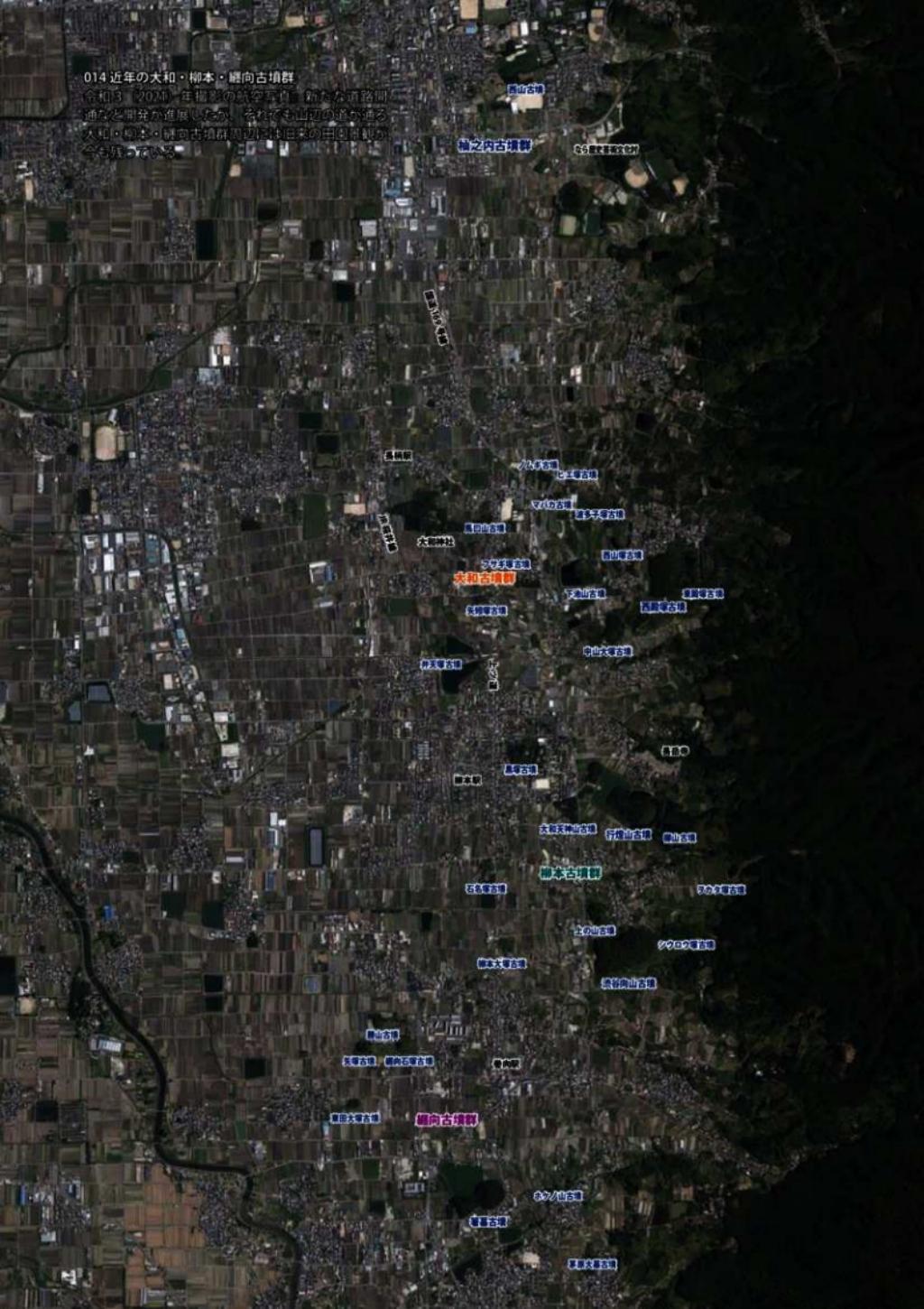
柳向古墳群

著喜古墳

茅原大塚古墳

014 近年の大和・柳本・経向古墳群

令和3(2021)年撮影の航空写真。新たな道路開通など開発が進展したが、それでも山辺の道が通る大和・柳本・経向古墳群は日本古の田舎並みが今も残っている。



大和古墳群・柳本古墳群と周辺集落

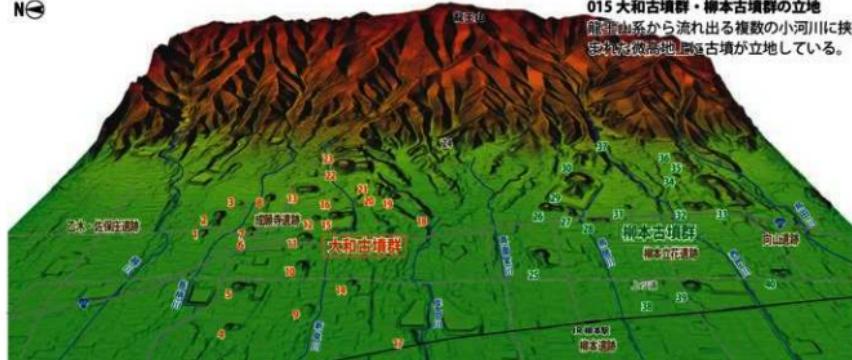
奈良盆地東南部の前期古墳群は古墳時代前期（3～4世紀）に形成された。それぞれの存続期間を重複させつつも、おおむね纏向古墳群、大和古墳群、柳本古墳群の順に築造が進んだことが知られている。

大和古墳群

大和古墳群は最高所の西殿塚・東殿塚古墳が高位～中位段丘を整形して造られており、同じ段丘上に燈籠山古墳・中山大塚古墳などが一つの稜線上に並ぶように立地している。とくに中山支群と呼ばれることが多い。西殿塚古墳北方～西方の低位段丘上にも、ヒエ塚古墳・ノムギ古墳・波多子塚古墳・下池山古墳・馬口山古墳などといった前方後円墳・前方後方墳が散在しており、壹生支群と総称されることがある。

いまの地形はなだらかな斜面のように見えるが、発掘調査の成果によれば実際には埋没した谷がいくつも入り込んだ複雑な地形であり、古墳は谷と谷に挟まれた微高地上にある。墳丘長200m超の西殿塚古墳を筆頭に、100m以上の前方後円（方）墳、それ以下の規模の前方後円（方）墳・円墳が混在しており、被葬者のランクに応じて墳丘の規模が決まっていた可能性がある。重層的な権力構造が既に出現していたらしい。

この大和古墳群は「円筒埴輪」の創生地でもある。円筒埴輪は弥生時代の吉備地方の墳墓で主に葬送のために用いられた特殊壺・特殊器台に起源をもつ。大和古墳群の中山大塚古墳・西殿塚古墳・東殿塚古墳では、特殊壺・特殊器台とともにそれらの特徴を色濃く残した初期の円筒埴輪が見つかっている。特殊壺・特殊器台の諸要素が次第に簡略化されて円筒埴輪に変化し、古墳と外部を隔てる結界のように立て並べられるよう



015 大和古墳群・柳本古墳群の立地

吉備山系から流れ出る複数の小河川に挟まれた微高地に古墳が立地している。

番号	古墳名	形態	全長	輪郭	主軸延	遺物
大和古墳群						
1	ノムギ古墳	前方後方墳	63	前規	土壇場	往内式・寄室式
2	ヒエ塚古墳	前方後円墳	127	前規	土壇場	
3	ケイロ古墳	円墳	45	前規	土壇場	
4	波多子塚古墳	前方後方墳	70	前規	土壇場	
5	鳥山古墳	前方後円墳	110	前規	堅穴？	残器品：特殊蓋台片・特殊蓋片
6	マコロ古墳	前方後方墳	74	前規	土壇場	二重圓錐形（西端・北端）、円筒埴輪
7	マツバ古墳	前方後円墳	74	前規	土壇場	（往内式・寄室式）
8	波多子塚古墳	前方後方墳	140	前規	堅穴？	埴輪：特殊蓋台形・堅底型・輪輪円筒・楕円筒、山形県南魚沼郡、赤堀高洋
9	平野古墳	円墳	54			
10	フサ子塚古墳	前方後方墳	110			
11	富野古墳	前方後円墳	120	前規	（土器・蓋玉）	
12	吉ノ山古墳	円墳	35	前規		
13	西山古墳	前方後円墳	114	後規	石室？	残器品：後規の円筒埴輪 （往内式・堅穴式・土器・土器・人造石）
14	矢張古墳	前方後円墳	102	前規		玉？
15	下池山古墳	前方後方墳	120	前規	堅穴石室	堅穴石室：柱石・板石・蓋玉・ガラス玉、堅底式輪輪（主室）
16	ホタッキ古墳	円墳	25			大和内行文花瓶（小石室）、直腹乳孔、加賀白
17	芦天井古墳	前方後円墳	70			
18	小谷寺古墳	前方後円墳	50	堅穴？		
19	中山大塚古墳	前方後円墳	130	前規	堅穴石室	特殊蓋台・特殊底、特殊蓋台形埴輪、円筒埴輪 （堅底・堅穴式）、堅底枕状、埴輪枕、埴輪枕
20	星谷山古墳	前方後円墳	110	前規	堅穴？	（石室・石室・蓋玉）
21	火矢古墳	前方後円墳	49			

番号	古墳名	形態	全長	輪郭	主軸延	遺物
柳本古墳群						
22	西殿塚古墳	前方後円墳	230	前規		特殊蓋台・特殊底、円筒埴輪
23	東殿塚古墳	前方後円墳	130	前規	堅穴？	堅底、円筒、堅底枕、堅底枕：土器底（小切丸底）・二重圓錐形（堅底・堅穴式）、堅底枕台、堅底式實・高脚、石舟
24	燈籠山古墳	前方後円墳	110			圓錐形
柳本古墳群						
25	高擧古墳	前方後円墳	134	前規	堅穴石室	三角錐形神體鏡33、西行等号神體鏡1
26	高擧古墳	前方後円墳	120	前規	木棺	堅底式・武具・馬具類
27	アソアド古墳	前方後円墳	65	前規		堅底式
28	大和文之山古墳	前方後円墳	103	前規	堅穴石室	堅底：23底、堅底式蓋台、堅工具類、水槽水41kg
29	行瀬山古墳	前方後円墳	242	前規	木棺	堅底：甲子印、土器類
30	星谷山古墳	前方後円墳	155	前規	堅穴石室	堅底：（円筒、堅底枕）、高环形、坚底、堅底枕、堅底形石制品、玉器、堅底影、土器類、土製品など
31	百草原古墳	円墳				
32	上の山古墳	前方後円墳	144	前規		堅底：（堅底枕）、堅底、堅底枕、堅底影
33	清留山古墳	前方後円墳	300	前規		堅底：（円筒、堅底枕）、堅底、堅底影
34	丸山古墳	円墳				
35	赤坂山古墳	方墳				
36	シカツク古墳	前方後円墳	120			埴輪
37	チカラ山古墳	前方後円墳	55			
38	ノバ古墳	前方後円墳	69			
39	石名古墳	前方後円墳	111	前規	堅穴石室	堅穴石室：（堅底・堅穴式）【主室】・大和内行文花瓶（小石室）
40	本大塚古墳	前方後円墳	94	前規	木棺	

になったのは、まさに大和古墳群からなのである。古墳文化を象徴する器物である円筒埴輪の成立過程で当地域が果たした役割はまことに大きい。

柳本古墳群

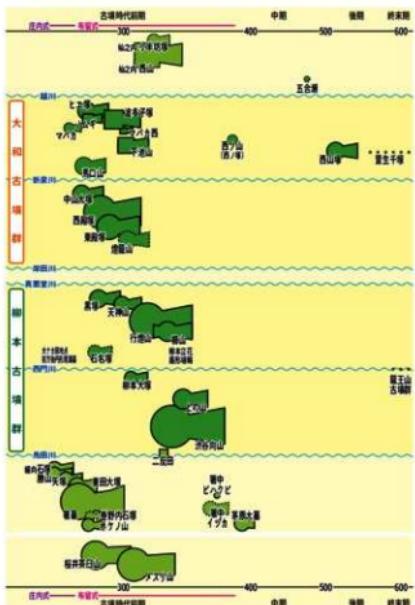
西門川北側の高位～中位段丘上に行燈山古墳・櫛山古墳、その下方に大和天山古墳・黒塚古墳などが築造されており、**柳本支群**と総称される。西門川南側の中位段丘上には古墳時代前期最大の渋谷向山古墳を筆頭に上の山古墳・シウロウ塚古墳などが並んでおり、**渋谷支群**と呼ばれる。このほか、西方の上ツ道沿いにも石名塚古墳・柳本大塚古墳などが散在する。

大和古墳群と同様に、200 m超の行燈山古墳・渋谷向山古墳を頂点として、100 m級以上の前方後円墳、それ以下の規模の前方後円墳・円墳からなる階層構造が現れている。いずれの支群においても古墳は谷と谷に挟まれた稜線上を利用しておらず、谷の埋没が進んだ現代の眼で見るよりも、実際に古墳を造営できる場所は限られていたらしい。

調査研究史上特筆すべきは黒塚古墳・大和天山古墳ではほぼ未盗掘の竪穴式石室が調査され、副葬器物の全容が明らかになっていることである。黒塚古墳では鏡鏡 34 面が、大和天山古墳では銅鏡 23 面が出土しており、一つの古墳からの出土数としてはとともに全国有数である。また、竪穴式石室や白蝶を用いた特殊施設が発掘調査された櫛山古墳では多量の腕輪形石製品が出土し、石劍・車輪石の破片数で言えば櫛山古墳が国内最多である。

銅鏡や腕輪形石製品は初期ヤマト政権が流通を掌握していた可能性が高い副葬器物であり、その分布は日本列島の広域に行きわたるが、数量的な分布の中心は明らかに奈良盆地東南部にある。とくに大きさがほぼ一定であった三角縁神獣鏡は、その数量の多寡によって被葬者を格付けしていたと考えられている。古墳の規模の大小とともに、多量副葬は被葬者の階層や属性を表象する仕組みとして定着していくが、そのような祭式の確立をみたのが、この柳本古墳群であった。

また、調査研究の進展により櫛山古墳や渋谷向山古墳などに草創期の家形埴輪や器財埴輪（蓋形埴輪・盾形埴輪など）があることが分かってきた。円筒埴輪に留まらない多彩な埴輪による祭式が、ここ柳本古墳群を起点として継承されていったのである。



016 大和古墳群・柳本古墳群の移り変わり

古墳群の変遷図。中小規模の古墳には時期不明のものも多い。周辺については古墳時代前期の古墳のみ描出した。

大和古墳群・柳本古墳群を支えた集落

近年の調査により集落遺跡の調査が進み、古墳群を造営した集団の実態にも光が当たりつつある。

大和古墳群の北方に位置する**乙木・佐保庄遺跡**では膨大な量の土器・木製品を使用した遺構が見つかっている。西殿塚古墳や東殿塚古墳の被葬者層等との関連性も想定され、大和古墳群の造営に関わった集落である可能性が高まっている。一方、大和古墳群と同じエリアに広がる**成願寺遺跡**では、これまでの調査で同時期の遺物の出土例は増えているものの、まとまった居住地の遺構は未だ見だせていない。

柳本古墳群近傍の**柳本遺跡**・**向山遺跡**・**柳本立花遺跡**などでも古墳時代前期の遺構が見つかっている。ただ、散在する微高地上に小集落が存在していたらしく、全体を大規模集落と評価すべきかどうか、まだ十分な材料がそろっていない。大和古墳群と柳本古墳群の造営に関わった集落が、纏向古墳群における纏向遺跡のように拠点性を備えた優勢なものであったかどうか、今後の調査を通じて明らかにしていく必要がある。

大和古墳群と柳本古墳群 調査研究の歩み

元治元	1864	渋谷村で石枕出土 行燈山古墳 「崇神天皇御陵修補」着工 (慶應元年 竣工) (柳本藩)
元治2	1865	行燈山古墳 南濠内から銅板出土 (柳本藩) 行燈山古墳を崇神天皇陵、渋谷向山古墳を景行天皇 陵とする治定が確定
明治26	1893	古墳の悉皆調査 (野瀬龍潛)
明治28	1895	柳本大塚古墳 後円部竪穴式石室の盗掘
明治29	1896	燈籠山古墳 銅鏡の出土
明治32	1899	古墳の悉皆調査 (山邊郡役所)
大正2	1913	「奈良山上邊郡誌」刊行開始 (大正5年まで) (山 邊郡教育會)
大正7	1918	柳本大塚古墳 小石室から内花文鏡出土
昭和11	1936	陵墓 (西殿殿跡・行燈山・渋谷向山) 模型制作 (京大) 行燈山古墳
昭和19	1944	柳本行燈山古墳に伴う文化財調査 (東)
昭和23	1948	燈籠山古墳 後円部 (中円部) 竪穴式石室・造り出し (後方部) の発掘調査 (東)
昭和24	1949	柳山古墳 後円部 (中円部) 塙輪列・造り出し (後 方部) の発掘調査 (東)
昭和33	1958	柳山古墳 国史跡指定 「天理古史」刊行 (市)
昭和35	1960	大和天神山古墳 墳丘破壊に伴う発掘調査 (県)
昭和36	1961	黒塚古墳 測量調査・前方部の発掘調査 (第1次) (県) 報告書「桜井茶山古墳・附黒塚古墳」刊行 (東)
昭和38	1963	報告書「大和天神山古墳」刊行 (東)
昭和46	1971	渋谷向山古墳 前方部裾の発掘調査 (宮内庁)
昭和47	1973	西塚古墳 墳頂土壇の調査 (東)
昭和49	1974	行燈山古墳 後円部外堀・渡り濠の発掘調査 (宮内庁)
昭和51	1976	フサギ塚古墳 前方部の発掘調査 (東) 「瑞城・磐余地域の前方部円墳」研究に伴う測量調査 (東) 「改訂 天理古史」刊行開始 (昭和54年まで) (市)
昭和52	1977	「古墳一覧」(改訂 天理市史・史料編集部) 刊行 (市)
昭和55	1980	行燈跡 発掘調査 (東)
昭和56	1981	「磯城・磐余地域の前方部円墳」刊行 (県)
昭和57	1982	黒塚古墳 測量調査 (第2次) (県)
昭和58	1983	成願寺遺跡 最初の発掘調査 (第1次) (市)
昭和60	1985	中山大塚古墳 後円部北側の発掘調査 (第1次) (県) 柳本遺跡 発掘調査 (四ノ坪地点) (市)
昭和61	1988	中山大塚古墳 発掘調査 (第1次) (県) 西殿殿古墳 後円部北側の発掘調査 (第1次) (市)
昭和63	1988	柳山古墳 前方部北側の発掘調査 (東)
平成元	1989	黒塚古墳 墳丘部の発掘調査 (第3次) (市)
平成2	1990	中山大塚古墳 西側くびれ部の発掘調査 (第2次) (県) 西ノ坂古墳 発掘調査 (市)
平成3	1991	成願寺遺跡 クリヤダ地区の発掘調査 (市)
平成4	1992	中山大塚古墳 前方部東側の発掘調査 (第3次) (市) 西殿殿古墳 前方部東側の発掘調査 (第2次) (市) 向山遺跡 発掘調査 (芭久保地点) (市)



018 黒塚古墳発掘調査
現地説明会の様子

平成10(1998)年1月16
～18日に開催した現地
説明会には3万人を超
える人々が訪れた。

017 大和古墳群・柳本古墳群 調査研究の歩み
権原考古学研究所・天理市教育委員会などに
より調査が続けられてきた。

平成5	1993	中山大塚古墳 後円部竪穴式石室の発掘調査 (第4次) (県・市) 西殿殿古墳 後円部東側の発掘調査 (第3次) (市) 東殿殿古墳 後円部北側の発掘調査 (第2次) (市) 乙木・佐保庄道跡 最初の発掘調査 (県) 櫛山古墳 墳丘の平板測量調査 (市) 渋谷向山古墳 後円部外堀・渡り濠の発掘調査 (宮内庁)
平成6	1994	中山大塚古墳 後円部・前部の発掘調査 (第5次) (県・市) 西殿殿古墳 墳丘周辺の測量調査 (市) 西殿殿古墳 前方部西側の発掘調査 (第4次) (市) 乙木・佐保庄道跡 発掘調査で確認 (県) 上方の山古墳 上の山古墳
平成7	1995	下池山古墳 後方部竪穴式石室の発掘調査 (第1次) (県・市) ムノギ古墳 後方部北側の発掘調査 (第1次) (県) 下池山古墳 くびれ・前部の発掘調査 (第2次) (県・市) 行燈跡 発掘調査 (市)
平成8	1996	東殿殿古墳 前方部西側の発掘調査 (第3次) で埴輪記録確認 (市) 黒塚古墳 後円部竪穴式石室の発掘調査 (第4次) (県・市) 柳本遺跡 大ナガ田地点の発掘調査 (市) 報告書「下池山古墳・中山大塚古墳調査報告書」刊行 (県)
平成10	1998	波多子古墳 後方部北側の発掘調査 (市) 黒塚古墳 前方部・作業道の発掘調査 (第5次) (県・市) 櫛山古墳 前方部南西側の発掘調査 (市)
平成11	1999	西殿殿古墳 前方部西側の発掘調査 (市) 波多子古墳 墳丘周辺の地質調査 (市)
平成12	2000	黒塚古墳 国史跡指定 タカタ塚古墳 発掘調査 (市) 柳本立花遺跡 発掘調査 (第1次) (市)
平成13	2001	タカタ塚古墳 発掘調査 (市) 「大和古墳後円墳集成」刊行 (県) 「やまとくべ古墳文化のあけぼの」刊行 (市)
平成14	2002	ヒエ塚古墳 北側周濠外堀の発掘調査 (県) マバカ古墳 前方部西側の発掘調査 (県) マバカ古墳 発掘調査で新規見出 (市) 黒塚古墳 天理市立黒塚古墳展示館開館 (市)
平成15	2003	中山大塚古墳 県史跡指定 ムノギ古墳 後方部東側の発掘調査 (県) 石名塚古墳 前方部南側の発掘調査 (県)
平成16	2004	下池山古墳 県史跡指定 報告書「西殿殿古墳・東殿殿古墳」刊行 (市)
平成17	2005	報告書「乙木・佐保庄道跡」刊行 (県)
平成18	2006	報告書「ムノギ古墳」刊行 (県) ホックリ塚古墳 発掘調査 (市)
平成19	2007	報告書「波多子塚古墳」刊行 (市) 報告書「マバカ古墳周辺の調査」刊行 (県)
平成20	2008	大和天神山古墳 県史跡指定 報告書「下池山古墳の研究」刊行 (県)
平成21	2009	ムノギ古墳 後方部南側の発掘調査 (第3次) (市)
平成22	2010	ムノギ古墳 後方部南側の発掘調査 (第4次) (市)
平成23	2011	ムノギ古墳 後方部の発掘調査 (第5次) (市) 西殿殿古墳 三次元航空レーダー測量 (県)
平成24	2012	西殿殿古墳 前方部頂点の発掘調査 (宮内庁) ムノギ古墳 後方部・前方部の発掘調査 (第6次) (市) 馬口山古墳 地中レーダー探査 (天大)
平成26	2014	ヒエ塚古墳 後円部南側の発掘調査 (第2次) (市) 報告書「大和古墳群！／ムノギ古墳」刊行 (市) 中山大塚古墳・ムノギ古墳・下池山古墳 国史跡指定
平成27	2015	「天理の古墳 100」刊行 (市) 渋谷向山古墳 測量調査・宮内庁北側の発掘調査 (宮内庁)
平成29	2017	ヒエ塚古墳 後円部北側の発掘調査 (第3次) (市) ヒエ塚古墳 航空レーダー測量調査 (市) 櫛山古墳 航空レーダー測量調査 (市)
平成30	2018	報告書「黒塚古墳の研究」刊行 (県)
令和元	2019	ヒエ塚古墳 前方部北側の発掘調査 (第4次) (市)
令和2	2020	ヒエ塚古墳 前方部西側の発掘調査 (第5次) (市)
令和3	2021	ヒエ塚古墳 前方部南西隅の発掘調査 (第6次) (市) マバカ古墳 航空レーダー測量調査 (市)
令和4	2022	マバカ古墳 前方部北側の発掘調査 (市)
令和5	2023	伝「ウツコ塚」・東良山 出土資料の公表 (島根大) 櫛山古墳 出土埴輪の再整理報告公表 (由良紀斐)

(策) 奈良県教育委員会・奈良考古学委員会 (天理) 天理大学 (立教) 清浦大学 (宮内庁) 宮内庁

大和古墳群とその周辺

大和古墳群は西方に鎮座する大和神社の宮郷である「大和郷」に重複して分布することからこの呼称がある（壹生古墳群と呼称されることもある）。古墳時代前期初頭～前期前半を中心に、長さ 230 m の巨大前方後円墳である西殿塚古墳を筆頭として、さまざまな規模の古墳が集中的、継続的に造営された。

中山支群では、埴輪の起源となる特殊器台が出土した中山大塚古墳や、特殊器台形埴輪が樹立し当古墳群で最大規模の西殿塚古墳、それに埴丘裾に特異な埴輪配列をもつ東殿塚古墳などがあり、同じ尾根筋上での累代的な築造が考えられている。

また、中山支群北方の斜面上では、中山大塚古墳と同時期ともいわれるヒエ塚古墳、最古級の大型前方後方墳であるノムギ古墳、中山支群で出現した初期の埴輪の系譜を引く波多子塚古墳、大型内花文鏡が埋納されていた下池山古墳などがある。奈良盆地東南部の前期古墳群のなかでは、この地域にのみ前方後方墳築造の系譜が存在することも特色である。

019 空から見た大和古墳群
南西から大和古墳群を望む。最高所には西
殿塚古墳・東殿塚古墳がある。手前は大和
古墳群と柳本古墳群を隔てる谷である。



なかやまおおつか 中山大塚古墳

中山町に所在する前方後円墳である。標高約90メートルの尾根上に前方部を南西に向けて築かれており、前方部付近には大和神社のお旅所がおかれたために削平を受けている。昭和60（1985）年以降、奈良県立橿原考古学研究所を中心とした学術調査が実施されている。

墳丘 墳丘は全長約130メートル、後円部径約67メートル、後円部の高さ約15メートルを測り、後円部は2段築成、前方部は1段築成である。

また、外部施設として前方部西側に作られた三角形の張り出し部と後円部北側の張り出し部があり、いずれも古墳に付属する施設と考えられている。

埋葬施設 後円部墳頂の中央に墳丘主軸に沿って築かれた竪穴式石室が見つかっており、長さ7.5メートル、天井までの高さ約2メートルの規模をもつ。なお、石室の南北両小口は隅に丸みをもつように石材が積まれている。石室の石材は大阪府羽曳野市と太子町の間に位置する春日山で採取された輝石安山岩が使用されている。

墳丘は戦国時代に城郭（山城）として再利用するために若干改変され、現状の墳丘形状が築造当初のものでないこともわかっている。

遺物 銅鏡片2点、鉄器36点などが石室内より見つかっており、盗掘が石室内全体におよんでいため細片化したものがほとんどだった。銅鏡は半肉彫獸帶鏡で、鉄器には鉄槍、鉄鎌などがある。

後円部石室の被覆石材上から宮型特殊器台片が出土した。このほか、後円部墳頂では特殊器台形（都月型）埴輪・円筒埴輪・壺形埴輪・特殊壺形埴輪などの破片が見られ、墓壇埋め戻し後の墳頂にこれら埴輪類が樹立されたと考えられている。埴輪類の使用は墳頂部に限定され、西殿塚古墳のように墳丘を囲んで樹立されていたものではないらしい。特殊器台・特殊器台形埴輪・円筒埴輪がともに出土している点で、古墳祭式の最も初期の様相を示している。

022 中山大塚古墳 くびれ部の葺石

基底部付近は60度ほどの急角度で積み、その上部は30~40度の角度で葺き上げる。葺石の厚さは最大90cmに達する重厚なものである。



020 中山大塚古墳 墳丘測量図

前方部西側に三角形の張り出し部、後円部北側に扇状の張り出し部を持つ。二つの張り出しあはいずれも地山を整形したものとされている。



021 空から見た中山大塚古墳

古墳のすぐ脇（写真右～上）を現在の山辺の道が通過している。





023 中山大塚古墳 穫穴式石室

石室の上部はさらに大量の石材で被覆されていた。



024 中山大塚古墳 穫穴式石室内部

石室内は盗掘を受けていたが、石室の構造はよく残っていた。



025 中山大塚古墳 銅鏡片

25mm × 20mm の小片である。銘帯部が残っており、「方」の字が見える。

026 中山大塚古墳 特殊器台片

写真は昭和 60 (1985) 年に採集された資料。このほか、発掘調査では破碎して撒かれたと考えられる宮山型特殊器台片が竪穴式石室の被覆石材から出土している。他の特殊器台形（都月型）埴輪や円筒埴輪とは異なる取り扱いがされたらしい。



特殊器台から円筒埴輪へ

古墳時代を代表する考古資料である、円筒埴輪。
その源流となったのは、弥生時代後期後半に吉備地方を中心広がっていた特殊器台と呼ばれる土器である。吉備地方では地域の首長を埋葬した墓に装飾を施した大型の器台と壺が供えられるようになり、やがて墳丘での葬送儀礼に供される特殊器台・特殊壺に発達していく。

特殊器台は受口状に発達した口縁と大きく張り出した安定感ある脚部が特徴で、胴部を巡る突帯の間を弧帯文などの文様で埋めている。こうした特徴は奈良盆地において簡略化され、やがて円筒埴輪に移り変わっていくが、初期の円筒埴輪には口縁部の形状や透孔、文様などに特殊器台の名残が色濃く残っている。



028 【参考】葛本弁天塚古墳の特殊器台

橿原市の葛本弁天塚古墳では 10 個体以上の宮山型特殊器台が見つかった。このほかにも特殊壺、二重口縁壺、特殊器台形埴輪が出土しており、大和の代表的な出土例である。

にしとのづか 西殿塚古墳

中山町に所在する前方後円墳で、大和古墳群中では最大規模の古墳である。

全長約 230 m、後円部径 145 m、前方部幅 130 m である。墳丘は後円部では東側 3 段、西側 4 段、前方部では東側 3 段、西側 4 段の段築により形成されている。さらに墳丘の西側には張り出しき状の地形があり、これを加えると 5 段の段築となる。また、後円部および前方部の頂墳には方形壇が存在する。

墳丘 現在は「手白香皇女衾田陵」として宮内庁により管理されている。平成元（1989）年には宮内庁書陵部により墳丘の調査が実施され、墳丘の各所から特殊器台や特殊器台形埴輪・特殊壺形埴輪などの遺物が採集されている。また、平成 5～7（1993～95）年には天理市教育委員会により墳丘周辺の範囲確認調査がおこなわれ、墳丘東側くびれ部と前方部東裾において墳丘斜面の基底石と堀割（周濠相当の落ち込み）が存在することが確認された。

遺物 天理市教育委員会の発掘調査の際に、有段口縁が特徴の円筒埴輪など多量の初期埴輪が出土した。これまでの発掘調査等で出土した埴輪からみて、特殊器台形埴輪を主体とする西殿塚古墳が先行し、次に朝顔形埴輪・鰐付円筒埴輪・鰐付梢円筒埴輪が出現する東殿塚古墳が構造されたものとみられる。

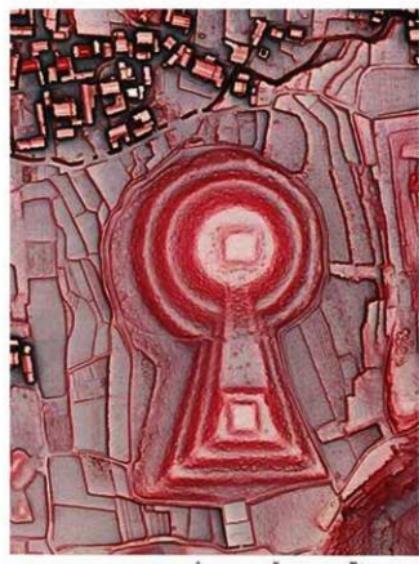
030 空から見た西殿塚古墳・東殿塚古墳

周辺では西殿塚古墳のみが宮内庁の陵墓として管理されており、その他の古墳はいずれも民有地である。西殿塚古墳上方に見えるのは曾生町の集落。



029 西殿塚古墳 墳丘周辺測量図

傾斜地に立地しているため墳丘の西側は東側に比べて斜面が長くなっているため、段数を増やして高低差が調整されている。



031 西殿塚古墳 赤色立体地図

3 次元計測した西殿塚古墳の赤色立体図。墳頂部の方形壇は桜井茶臼山古墳・メスリ山古墳にも存在し、竪穴式石室を被覆する外部施設であることが判明している。



032 西殿塚古墳 特殊器台・特殊器台形埴輪
宮内庁書陵部の調査により後円部頂上方に特殊器台や特殊器台形埴輪が採集された。その後の天理市教育委員会による調査では埴丘裾付近から円筒埴輪が出土している。特殊器台と円筒埴輪が使用される場所は区別されていたらしい。



033 西殿塚古墳 前方部東側の基底部

天理市教育委員会の発掘調査により、宮内庁の管理する陵墓の範囲外にも埴丘が広がっていることが確認された。前方部東側（第2-II調査区）では、陵墓の範囲（生垣より奥）の外側に大ぶりな葺石の基底石が並んでいた。基底石の列は途中で屈曲しており、前方部東側に小規模な造り出しそうな遺構があった可能性も指摘されている。この基底石列のさらに外側には周濠状の落ち込みが広がっていた。



034 西殿塚古墳

発掘調査で出土した円筒埴輪
埴丘裾の発掘調査で出土した有段口縁の円筒埴輪は、もともと埴丘斜面途中の平坦面に樹立されていたものが転落したものと考えられている。後に一般的になる埴丘の上や周囲を円筒埴輪で囲むスタイルは、この西殿塚古墳で確立した。円筒埴輪には、口縁部の形態や製作技法などで様々なバリエーションがあり、整形や表面の仕上げなどに個异性がなく、様々な試行錯誤がおこなわれたことをうかがわせる。



ひがしとのづか 東殿塚古墳

中山町に所在する前方後円墳で、西殿塚古墳の東側に隣接して築かれている。

墳丘 長方形に整形された全長 175 m の区画の上に前方後円形の墳丘が乗る特異な形状で、墳丘は全長約 139 m、後円部直径 65 m、前方部幅 49 m ある。長方形の区画は堀割と外堤が埋没した姿らしい。

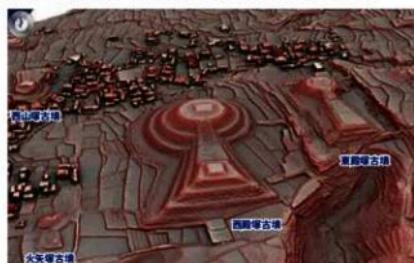
平成 8（1996）年に前方部西側の墳丘から外堤にかけて、天理市教育委員会が発掘調査をおこなった。墳丘斜面には葺石が施されており、斜面裾付近や流土中から埴輪片が出土することから、墳頂部やテラス上に埴輪列の樹立が想定されている。また、前方部西側の下段墳丘裾から堀割に向けて突出する造り出し状の「突出部」が見つかった。

遺物 この突出部には大小の埴輪を三角形に並べた埴輪配列による祭祀の場（祭壇）が作られており、朝顔形埴輪や鰐付円筒埴輪・檐内筒埴輪など、西殿塚古墳には見られなかった新しい特徴を持つ初期の埴輪とともに、古いタイプの布留式土器と近江・山陰地方の土器と一緒に添えられていた。また、この祭壇の南端には葬送の船を描いた鰐付楕円筒埴輪が立てられていた。東殿塚古墳の埴輪群は、以後の奈良盆地東南部の埴輪様式の発展の起点となった。



036 東殿塚古墳 墳丘測量図

墳丘西側では幅 9 m 前後の堀割が検出されている。また、墳丘東側にも堀割状の地形が残り、現在は溜池となっている。



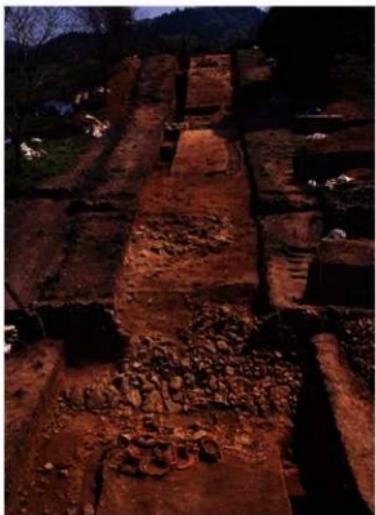
037 西殿塚古墳・東殿塚古墳 赤色立体鳥瞰図

平成 24（2012）年におこなわれた航空レーザー計測による 3 次元の鳥瞰図。寄り添うように築かれた 2 基の古墳の姿が分かる。

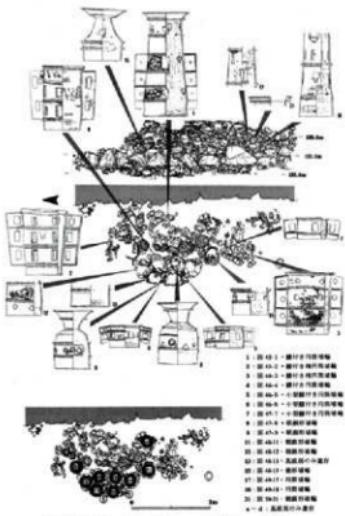


038 東殿塚古墳 前方部西側堀割の調査風景

北調查区での地元小学生への説明風景。堀割は深さ 1.8 m 程度。写真手前が墳丘に当たり、「突出部」の埴輪配列が見えている。



039 東殿塚古墳 前方部西側埴輪の「突出部」
北調査区の全景。写真下に見えるのが「突出部」
上に配列された各種埴輪と土器群。南北4m、
東西1.5mの範囲に逆台形に配列されている。



040 東殿塚古墳「突出部」の埴輪配列状況

合計15個体前後の埴輪と外来系土器を含む土器群
が密集して並べられていた。墓前に埴輪・土器を
供獻した祭壇のような施設であったと考えられる。

041 東殿塚古墳「突出部」に並べられた埴輪
墓前の祭壇のために並べられた多様な埴輪。意匠や高
さの異なる埴輪をあえて作り、それらを前後に配列して
立体的な空間を生み出していた。個々の埴輪には特殊器
台や特殊壺などの古い要素も色濃く残っており、埴輪生
産が画一化する以前の姿である。





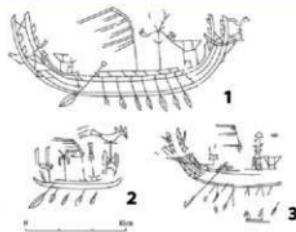
1号船画



2号船画



3号船画



042 東殿塚古墳

船を描いた堵付指円筒埴輪
3隻の船が描かれている。船を描いた埴輪としては現在知られているなかで最古の資料である。船には旗、蓋、大力などの祭器が並べられており、多数の種も備えている。右側が船首らしく、先頭には鳥の姿も見える。死者の靈魂を運ぶ葬送の船を鳥が先導する場面だろうか。



043 東殿塚古墳 鮋付円筒埴輪

円筒埴輪の両側に魚の鮋のように透孔や突帯を表現する粘土板を取り付けたもの。鮋にも透孔や突帯を表現するのは古い要素である。巴形や三角形の透孔は祖型となつた特殊器台の要素を受け継いだものといえる。



044 東殿塚古墳 朝顔形埴輪

器台に相当する円筒部の上に壺形埴輪を乗せた形態の埴輪。
東殿塚古墳の段階で新たに加わった種類の埴輪である。

045 東殿塚古墳 壺形埴輪

胴部に突帯が巡る特殊壺の形態に似るが、
底部は既に埴輪の形に変化している。本資料は朝顔形埴輪に含めることもある。



046 東殿塚古墳 内傾形円筒埴輪

東殿塚古墳では埴輪の形態が一気に多様化した。この内
傾形円筒埴輪は上にいくほどすぼまる形態で、類例は乏
しい。最近の接合検討作業により、口縁までの全形が復
元できるようになった。推定高さは約130cmある。



047 東殿塚古墳 墓輪配列に供えられた土器

東殿塚古墳の突出部には多様な埴輪とともに各種の土器が供えられていた。
多くはあえて底部に孔を開けた土器(底部穿孔)や、割られた土器(破砕土器)
だった。東殿塚古墳でみられた小型器台・小型丸底土器と二重口縁壺の組
み合わせは、葬送儀礼の道具(供膳具)の一つの典型となっていく。



とうろうやま 燈籠山古墳

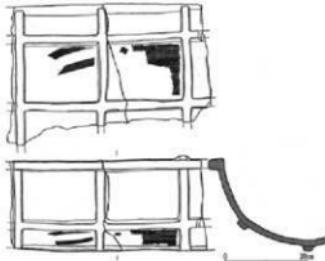
西殿塚古墳と中山大塚古墳の中間に位置する前方後円墳で、中山支群のなかでは唯一前方部を西に向ける。後円部が果樹園、前方部が地元の共同墓地として大きく改変されている。後円部東側には台形を呈する張り出し部があり、墳丘本体との関連性が注目されている。測量調査成果によると墳丘の規模は全長約110m、後円部径約55mである。

発掘調査はおこなわれていないが、後円部で竪穴式石室の部材とみられる板石が多く採集されており、大阪府柏原市や徳島県の石材であることがわかっている。また、墳丘各所で円筒埴輪や朝顔形埴輪の破片が採集されている。このほか、明治29(1896)年に出土した埴製枕が大阪府の藤田美術館に所蔵されているのに加え、奈良県立歴史博物館が所蔵する埴質棺の破片も本古墳に由来する資料とみられている。



048 燈籠山古墳 墓室

被葬者の頭部を安置するための埴製枕（埴質枕）。藤田美術館所蔵の重要文化財。長辺36.8cm、短辺29.4cm、厚さ8.0cmの長方形で、全面に朱が塗られており中央をΩ形に窪ませて周囲に繊維文や幾何学文を線刻する。埴製枕の出土例は国内でも数えるほどで、燈籠山古墳例は最古のものとして知られている。



049 歴史博物館所蔵の埴質棺

断面半円形の棺身の一部である。現存長は47.4cmで、外面に格子状に突帯を表現し、内外面には赤色顔料が全体にみられる。その製作技術には円筒埴輪と共通するところが多い。本来は棺蓋もあつたはずだが、発見時にはすでになかったようである。本資料は明治31(1898)年に学界に報告されて以来、中山大塚古墳からの出土品とされてきたが、燈籠山古墳の前方部周辺から出土した可能性が高いことが今尾文昭氏により明らかにされている。



050 燈籠山古墳 墳丘測量図

後円部東側に逆台形の張り出しがある。左上は火矢塚古墳である。



051 空から見た燈籠山古墳

前方部は地元の共同墓地として利用され、後円部は果樹園である。当地の景観に最も溶け込んだ古墳のひとつとも言える。

「ウブコ塚」「東良山」の考古資料

山形県庄内地方の豪商であった本間家が収集した美術品を中心とするコレクション（公益財団法人本間美術館蔵品）のなかに、大和古墳群に由来する可能性が高い考古資料の一群が存在することが、最近になって岩本崇氏らにより報告された。

「ウブコ塚」の考古資料 「明治廿六年四月廿八日 大和国山辺郡朝和村大字中山ノ東殿冢一各 ウブコ冢ヨリ発見」と記された資料である。『奈良縣山邊郡誌』（1913）には東殿塚古墳について「俗ニウブ山ト云フ」との記載があり、『奈良縣史蹟勝地調査會報告書』（1925）も東殿塚古墳を別名「ウブ山」とする。

本資料群は銅鏡破片、銅鏡、石製品破片、玉類からなる。銅鏡破片は三角縁四神四獸鏡の一部で、京都府椿井大塚山古墳などに「同范鏡」が存在する。石製品には緑色凝灰岩製の鍔形石破片が含まれている。勾玉は翡翠製の優品である。本資料群の時期はこれまで想定されてきた東殿塚古墳の時期と矛盾がないともと東殿塚古墳の副葬品であった可能性が高いとみられている。

「東良山」の考古資料 「明治廿六年五月二日 大和山辺郡朝和村大字中山ノ東良山発出」と記された資料である。現在の天理市中山町に「東良山」という地名は見当たらないが、もしこれを「とうろうやま」と読むことが許されるならば、中山町の燈籠山古墳が出土地の有力候補として浮上する。

本資料群は銅鏡破片 3面分、銅鏡、玉類からなる。銅鏡破片はいずれも三角縁四神四獸鏡の一部で、黒塚古墳などに「同范鏡」が存在する。勾玉は翡翠製である。

燈籠山古墳ではかつて埴製枕、玉類、石製品が出土したと伝えられ、このうち埴製枕は大阪府藤田美術館蔵品として現存するが、その他は所在が分かっていない。本資料群に玉類を含んでいることは興味深い符合であるといえよう。「東良山」が燈籠山古墳のことを指す可能性は十分にある。



052 「ウブコ塚」の考古資料

右下の鑿頭式銅鏡の長さ 5.2cm。
中央下は三角縁神獸鏡の一部。

053 「東良山」の考古資料

中央上の鑿頭式銅鏡の長さ 5.2cm。
5点の鏡片は三角縁神獸鏡 3面分の一部であることが判明した。

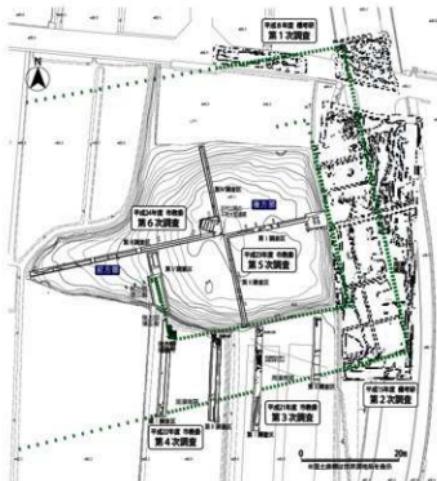


ノムギ古墳

佐保庄町に所在する前方後方墳である。ヒ工塚古墳と東西に並ぶように位置する。墳丘は前方後方形で現存長約 63 m であるが、前方部は大きく改変されている。後方部は一辺約 37.5 m に復元できる。

平成 8（1996）年度と平成 15（2003）年度には、奈良県立橿原考古学研究所が道路建設に伴う発掘調査をおこない、後方部北側と東側の周濠を確認した。後方部北側周濠では古墳時代前期後半の鰐付円筒埴輪が出土したが、後方部東側周濠からは古墳時代前期初頭にさかのぼる土器群が多量に出土した。

さらに、平成 21（2009）年度からは天理市教育委員会が範囲確認調査を開始し、後方部南側の周濠を確認するとともに、南側くびれ部を検出した。さらにも、後方部墳丘が地山の上に厚さ 2 m 以上の盛土をおこなって墳丘を造成していることがわかった。墳丘の調査では埴輪は出土せず、後方部北側周濠で出土した埴輪はノムギ古墳のものではない可能性が高まった。ノムギ古墳の築造時期は古墳時代前期初頭にさかのぼり、大和古墳群最初の前方後方墳に位置づけられる。



054 ノムギ古墳 墳丘測量図

周濠や墳丘隅角が直角に屈曲していることから、前方後方墳であることが確定的になった。



055 ノムギ古墳 墳丘模型

天理市教育委員会所蔵の模型。前方部が細長いのは周濠から墳丘が削られたことによるもの。

056 空から見たノムギ古墳・ヒ工塚古墳
大和古墳群を北から望む。遠景に柳本古墳群や箸墓古墳が見える。





057 ノムギ古墳 後方部東側周濠の検出状況

写真左がノムギ古墳の墳丘を南から見たところ。
直角に屈曲する周濠南東の隅角がよくわかる。



058 ノムギ古墳 後方部東側周濠の完掘状況

写真右がノムギ古墳、左がヒエ塚古墳。ノムギ古墳
とヒエ塚古墳はほぼ同時期に造られた可能性が高い。



059 ノムギ古墳 後方部東側周濠内の遺物出土状況

周濠内からは古墳時代前期初頭の土器が多量に出土
した。周濠の外側から投棄された可能性が高い。



060 ノムギ古墳 後方部東側周濠内出土土器

甕、壺、高杯、器台などの日常使われるものや、東海・
北陸・瀬戸内などの外来系土器も含まれている。



061 ノムギ古墳 後方部南西隅の検出状況

天理市教育委員会の発掘調査により、地中に埋没し
た後方部の南西隅部分が確認された。



062 ノムギ古墳 後方部北側周濠内出土埴輪

古墳時代前期後半の鰐付円筒埴輪の破片を含んでおり、東側周
濠の土器とは時期が合わない。墳丘本体の調査では埴輪が出土
しておらず、本資料がノムギ古墳に伴う可能性は低い。

ヒ工塚古墳

益生町に所在する前方後円墳である。クラ塚古墳（円墳）、ヒ工塚古墳（前方後円墳）、ノムギ古墳（前方後方墳）が一列に並ぶように築かれている。

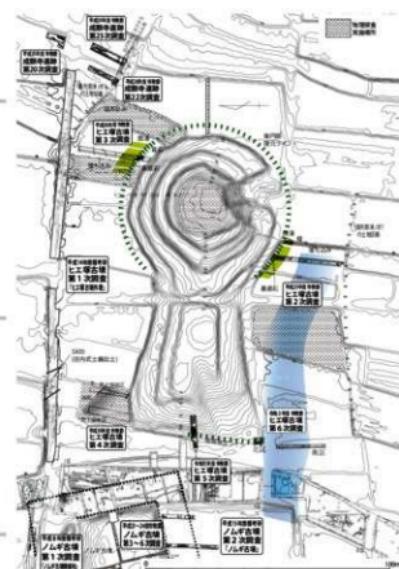
ヒ工塚古墳は周辺の地割から幅 30 m ほどの盾形の周濠をもつと考えられてきた。古墳北側の道路工事に伴って奈良県立橿原考古学研究所が実施した第 1 次調査では周濠北側に沿う外堤の存在が想定され、発見された溝 SX05 の埋没時期から、外堤の整備時期が古墳時代前期初頭であるとされた。

しかし、平成 25（2013）年度以降に天理市教育委員会が実施した後円部南側・北側の調査により、後円部を取り巻く周濠の幅は 4～10 m と従来の想定より狭いこと、古墳の南側には周濠と別の谷筋が流れていることが分かった。両調査で確認した墳丘裾（基底

石）の位置を航空レーザ測量や地中レーダ探査の成果と照合した結果、後円部の直径は 69 m となった。後円部北側の墳丘裾では厚い裏込め石材を伴う葺石を確認している。

前方部前面で実施した調査では墳丘主軸付近の前方部前端を確認し、古墳の全長は 127 m となることが分かった。さらに、前方部南西隅の調査で墳丘の隅角を確認したため、前方部の形状が従来の推定通り撥形に開く形状であることがほぼ確実になる一方、前方部前端のラインが墳丘主軸に直交せず、左右非対称の形状であった可能性が高いことも判明した。基底部の標高差が墳形に影響したようだ。

築造時期を示す手がかりは十分ではないが、墳形が中山大塚古墳（古墳時代前期初頭）に類似すること、盛土や葺石の間から古墳時代前期初頭以前の土器が出土するなどの状況から、この古墳も古墳時代前期初頭に築かれた可能性が高いものとみられる。



064 ヒ工塚古墳 墳丘測量図・調査区配置図

後円部周辺は從来考えられていた幅広の盾形周濠ではなく、幅の狭い周濠が巡っていたことが判明した。

063 ヒ工塚古墳 地形起伏図

ヒ工塚古墳は墳丘が段々畳に造成されており、現在の地形は本来の段築構造を反映していない。



065 ヒ工塚古墳 後円部北側の葺石

後円部北側の埴丘裾付近に設けた第3次調査区で確認した葺石。厚い裏込めを伴う葺石が施されていた。



066 ヒ工塚古墳 前方部前面の葺石

前方部前面で埴丘主軸に沿うように設けた第5次調査区では、埴丘裾付近の基底石を確認した。この基底石の発見で、古墳の規模が約 127 m であることが確定した。



067 空から見たノムギ古墳・ヒ工塚古墳

二つの古墳を南から望む航空写真。両古墳は大和古墳群の北端に位置し、北方には乙木・佐保庄遺跡が広がる。ノムギ古墳・ヒ工塚古墳の中間には県道天理環状線が通っている。



068 ヒ工塚古墳 古墳北側の溝 SX05

ヒ工塚古墳北方の道路整備に伴う調査（第1次調査）では、庄内式期の遺物が多く出土する溝 SX05（幅 10 m、深さ 1.5 m）が見つかった。周濠と外堤の整備時に埋められた溝と考えられてきたが、その後の調査で周濠は想定より狭いことが判明したため、この構造もヒ工塚古墳の築造時期とのかかわりを再検討する必要が生じている。



069 ヒ工塚古墳 古墳北側の溝 SX05 出土遺物

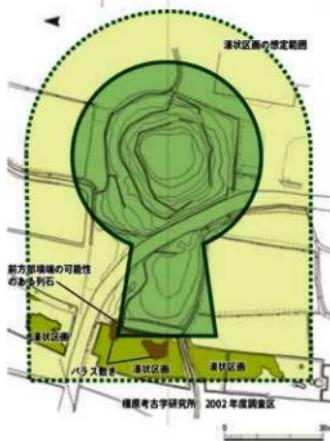
溝 SX05 の出土遺物は土器に限られ、甕や鉢などの日常雑器が大半である。また、東海系などの外来系土器を多く含んでいる。近在の集落で使用されていた土器が、同時に一括で投棄されたものと考えられている。

マバカ古墳

萱生町に所在する古墳で前方後円墳とされているが、墳丘が後世にかなり改変されていることもあります、本来の墳形については議論がある。

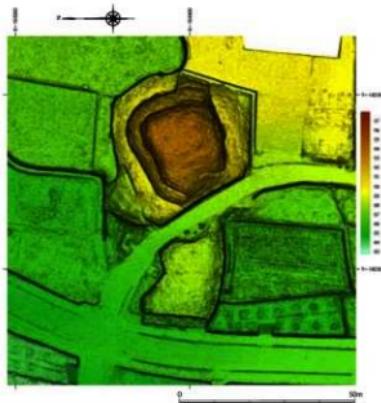
県道建設に伴って平成14（2002）年以降におこなわれた奈良県立橿原考古学研究所による発掘調査では、前方部墳端の可能性のある列石や墳丘裾廻りのバラス敷き、濠状区画など、古墳に関連する可能性のある遺構が見つかった。濠状区画は通有の古墳周濠に比べて底面の凹凸が激しいものだが、墳丘の周囲全体に巡っていた可能性が高いと考えられている。調査成果を踏まえた検討により墳丘の全長は83mに復元されている。濠状区画からの出土土器は少数であったが、古墳時代前期初頭に築造された可能性が高い。

令和2（2020）年度以降は天理市教育委員会による測量調査や発掘調査が始まっています、今後解明が進むことが期待される。



070 マバカ古墳 復元図

前方部の西側で発見された濠状区画や周辺の地割から想定して作成された復元図。古墳の周囲に盾形の濠状区画が巡っていたと想定されているが、不完全なものであつたらしい。



071 マバカ古墳 地形起伏図

航空レーザ測量による3次元データ。墳丘は市道によって後円部と前方部が切断されているほか、果樹園として利用されているため地形が大きく変わっている。



072 空から見たマバカ古墳

県道建設に伴って前方部の西側で発掘調査が実施された。



073 マバカ古墳 濠状区画とバラス敷き

前方部の周囲で見つかった濠状区画は底面の凹凸が激しいもので、区画内には拳大の石を敷き詰めた場所もあった。通常の古墳周濠の姿とは大きく異なり、典型的な古墳周濠が成立する以前の古い形態を示している可能性がある。

マバカ西古墳

マバカ西古墳のすぐ西側に所在した古墳である。平成14（2002）年に個人住宅建設に伴う発掘調査を天理市教育委員会が実施した際に新規発見した。

発掘調査では埋没した古墳の盛土と周濠の一部が見つかった。周濠内からは突帯附加技法（方形突起）のある円筒埴輪片や焼成前に底部に穿孔した二重口縁壺（壺形埴輪）などが出土しており、波多子塚古墳より後続すると考えられている。また、周濠内には多量の礫が入っており、葺石を持っていた可能性がある。墳丘の規模は明らかでないが、周辺地形からみて東西方に向に主軸を取るものと思われ、周濠の平面形が直線的で直角に屈曲する形状であることから、長さ50m以下の前方後方墳となる可能性が報告されている。



074 マバカ古墳・マバカ西古墳位置図

マバカ古墳の西方で新たに発見された埋没古墳はマバカ西古墳と命名された。



075 マバカ西古墳 調査区平面図・土層図

ほぼ直角に屈曲する溝が見つかり、埋土上層からは古墳～平安時代の遺物が、埋土下層からは弥生時代後期～古墳時代前期の遺物が出土した。埋土中には多数の礫が含まれており、古墳の葺石由来する可能性がある。



076 マバカ西古墳

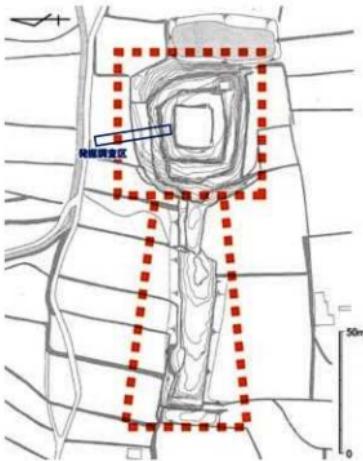
底部に穿孔した二重口縁壺（壺形埴輪）

周濠から出土した二重口縁壺は底部に孔があいており、焼成前から底面は作られていなかつた。埴壺に複数並べられていたものが周濠内に転落したのであろう。写真左下は頸部の形態が異なる別の個体である。

はたごづか 波多子塚古墳

萱生町に所在する前方後方墳である。現状の墳丘規模は全長 140 m である。前方部の形態が細長いことが特徴だが、これは墳丘が耕作地として利用されるなかで本来の墳丘形状から大幅に改変されたものと考えられる。墳頂部外縁の石垣には板状の石材が多く使われており、埋葬施設が竪穴式石室であったことがうかがえる。

平成 10（1998）年に天理市教育委員会が後方部北側でおこなった発掘調査では、墳丘裾の葺石と周濠の存在が明らかとなり、外堤上部の盛土面では板石積みの小石室も見つかった。出土した埴輪には朝顔形、鰐付、特殊器台形などがあり、その組合せは東殿塚古墳の系譜を引きつむる新しい要素を加えている。





081 波多子塚古墳 墓輪

波多子塚古墳から出土した埴輪はいずれも破片であるが、特殊器台形埴輪、特殊菱形埴輪、朝顔形埴輪、鍍付円筒埴輪、精円筒埴輪があり、東殿塚古墳と共に通する構成になっている。特殊器台形埴輪は三角形や巴形の透孔をもつが、東殿塚古墳よりも後出するものと考えられる。

大和古墳群における前方後方墳

主たる墳丘の平面形が円形をなす前方後円墳に対して、主たる墳丘が方形をなすものを前方後方墳と呼んでいる。弥生時代の方形周溝墓の一辺の中央に設けた陸橋が次第に発達してうまれた前方後方形の墳丘墓（定の範囲を区画して墓）に起源があるとされる。

東日本では古墳時代前期中頃までにつくられた古墳のほとんどが前方後方墳であることが知られており、とくに東海地方に前方後方形の墳墓の淵源を求める見方も有力である。古墳時代を通じて主流であった前方後円墳に対し前方後方墳は傍流に位置づけられることも多かったが、埋葬施設や副葬品などの要素において前方後円墳に遜色ない内容を有する前方後方墳も知られるようになっている。

初期ヤマト政権を担った有力者の古墳が数多く分布する奈良盆地東南部の古墳群のうち、とくに大和古墳群に前方後方墳が集中することはよく知られている。奈良盆地における前方後方墳は14基程度で、このうち大和古墳群には6基ある。古墳時代前期初頭のノムギ古墳が最古で、波多子塚古墳や下池山古墳などがそれに後続する。そして、大和古墳群北方の袖之内古墳群には、日本最大の前方後方墳である西山古墳が存在する。墳形が十分に解明されていない古墳もあり、今後の増減も予想される。

こうした前方後方墳の分布の偏在は、とくに古い時期の古墳が集中する大和古墳群の特色の一つといえるが、地域性・政治性・階層性といった被葬者の属性をどの程度反映しているのか、今後解き明かしていくべき課題となっている。



082 里塚古墳・フサギ塚古墳

大和古墳群を構成する前方後方墳だが、墳形などの詳細は分かっていない点が多い。



083 袖之内古墳群 西山古墳

日本最大の前方後方墳（長さ180m）。大和古墳群から北へ約3kmの地点に位置する。

しもいやはま 下池山古墳

成願寺町集落東方の傾斜地に位置し、前方部を南に向けた前方後方墳である。

墳丘 平成7～8（1995～96）年に学術調査がおこなわれた。築造当時の墳丘規模は全長125mに復元されている。墳丘は前方部・後方部とも2段に築かれ、斜面は小ぶりの葺石で覆われている。埴輪列は持たないようである。

埋葬施設 後方部墳頂の中央に墳丘主軸とほぼ平行して、内法で6.8mもの長大な竪穴式石室が築かれ、石室内には割竹形木棺が安置されていた。石室上部は、壁として積んだ石を上方で徐々にせり出させる合掌形で築かれている。石室の北西側には、銅鏡を納めた内法約50cm四方の小石室が見つかった。石室の石材は大阪府柏原市に産する石材と判明している。

遺物 竪穴式石室内から腕輪形石製品（石釧）、勾玉、管玉、ガラス玉、鉄製品が見つかった。また、小石室で見つかった銅鏡は直径37.6cmの大型内行花文鏡である。鏡の表面には毛織物や絹織物、真綿などの繊維類のほか鏡箱と思われる断片が付着していた。



084 下池山古墳 墳丘測量図



085 下池山古墳 後方部墳頂の基壠
中央部には竪穴式石室を被覆する粘土が、盗掘により部分的に破壊されながらも残っていた。



086 空から見た下池山古墳

東の仕空から撮影した下池山古墳。周辺にも前方後方墳や円墳が点在している。



087 下池山古墳 小石室から出土した内行花文鏡

墓壇の北西隅の礎面に設けられていた小石室。安山岩の板石で組まれた石室内に銅鏡が埋納されていた。大正年間に柳本大塚古墳で内行花文鏡を埋納した小石室が発見されているが、本例もそれに酷似している。



088 下池山古墳 竪穴式石室から出土した木棺

写真左端の上部から内側にせり出た谷筋状の窓窓。内部から二つナベの大きさをくり抜いた複数個木棺が出土した。



089 下池山古墳 内行花文鏡

直径 37.6cm。有機質の付着状況から、鏡袋に包まれ、さらに鏡箱に収められた状態で埋納されたものとみられる。



090 下池山古墳 石製品

写真左端の石劍はガラス質凝灰岩製。左下の勾玉はいずれも翡翠製である。



091 下池山古墳 鉄製品

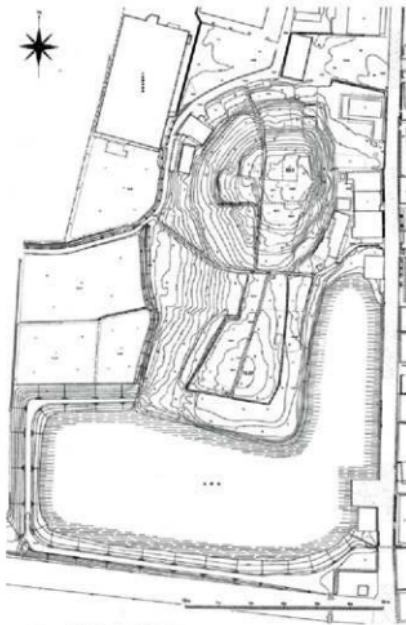
写真左は刺突具（ヤヌや結などの漁撈具）で、端部に糸を巻いた痕跡があり、複数本を束ねて一組としていたらしい。

ばくちやま 馬口山古墳

兵庫町に所在する前方後円墳である。東側には古代官道である上ツ道が南北に走り、南側には大和神社の参道が東西に延びている。

墳丘は現状で全長 110 m、後円部直径 62 m である。前方部を南に向けている。前方部の南西から東南にかけて溜池が巡るが、これが周濠に由来するものかどうかは確認されていない。これまでに発掘調査はおこなわれていないが、後円部にて板石が採取されており、埋葬施設が竪穴式石室である可能性が指摘されている。平成 22(2010) 年には天理大学により後円部墳頂の地中レーダ探査が実施され、何らかの施設が後円部墳頂の地中に遺存している可能性が高いことが指摘された。また、墳丘上で特殊器台、特殊壺が採集されたこともかつて報告されており、古墳時代前期初頭にさかのぼる可能性が指摘されている。

馬口山古墳のほかにも、上ツ道に接する位置に前方後方墳(フサギ塚古墳) や前方後円墳(矢矧塚古墳・弁天塚古墳) が点在するが、墳形や築造時期の解明はまだこれからである。



092 馬口山古墳 墳丘測量図

093 空から見た馬口山古墳

墳丘上は耕作地として利用されている。古墳の南(写真左)には大和神社の参道、東(写真右下)には上ツ道が通っている。



おとぎ さほのしょう 乙木・佐保庄遺跡

乙木町、佐保庄町にまたがる遺跡で、竹之内山西麓の扇状地に位置する。大和古墳群・成願寺遺跡からは谷を挟んですぐ北側の位置にある。

平成5（1993）年以降に県道建設に伴って奈良県立橿原考古学研究所が発掘調査を実施した。自然流路や溝を中心に遺物が多量に出土しており、古墳時代前期前半に最盛期を迎えたことが分かっている。出土遺物には山陰系をはじめとする外来系土器を含み、精製土器が多く祭祀性を強く帯びている。また、木製威儀具・精製容器・祭祀具・大型建築部材などの特殊な木製品が出土していることも特徴である。上流に有力首長が経営した集落が存在した可能性があり、大和古墳群の被葬者層との関連が指摘されている。

095 乙木・佐保庄遺跡 鰐形木製品

長さ 52.1cm でヒノキ製。半円形の部分が二枚板になっており、小孔が2箇所あいている。肩を挟んだものと推定され、首長の威儀を正す場面で用いられたものかもしれない。巨大古墳の副葬品にみられる玉杖との関連も注目される。



094 空から見た乙木・佐保庄遺跡

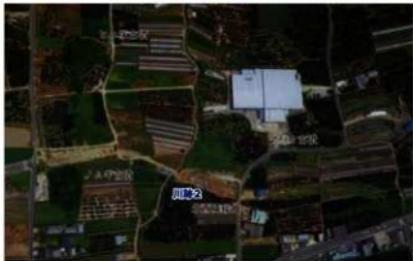
背景に大和古墳群・橿原古墳群が広がる



096 乙木・佐保庄遺跡 土器満り出土土器

じょうがんじ 成願寺遺跡

成願寺町を中心にはほぼ大和古墳群と同一の範囲に広がる遺跡である。昭和60（1985）年以降、天理市教育委員会が20次以上にわたって発掘調査をおこなっているほか、県道建設に伴う奈良県立橿原考古学研究所による発掘調査もおこなわれてきた。



097 空から見た成願寺遺跡

マバカ古墳の北方で見つかった埋没した谷（川跡2）からは古墳時代を中心とした多量の遺物が出土した。

それぞれの古墳近傍で古墳時代前期前半に遡る遺物が出土している。なかでも、マバカ古墳北側の谷（川跡2）からは古墳時代を中心とした大量の遺物が出土した。居住地などは未だ明確にはなっていないものの、古墳造営に関わった集団の小集落が点在していた可能性が高い。乙木・佐保庄遺跡に比べると、木製威儀具を含まない点などから、階層的には下位の集落であったと考えられている。



098 マバカ古墳北方川跡2 6層出土遺物

この谷からは古墳～平安時代の遺物が出土した。とくに下層（6層）から古墳時代前期初頭の遺物がまとめて出土した。

にしのやま 西ノ山古墳

西ノ塚古墳と表記する例もある。下池山古墳のすぐ北側に隣接する直径 35 m の円墳である。

個人住宅建設に伴って平成 2 (1990) 年に天理市教育委員会が発掘調査を実施した。その結果、墳丘南側の周濠の一部と外堤に相当する盛土を確認した。また、墳丘裾から周濠中央にかけての緩やかな斜面に、貼石状の葺石が敷き詰められていることもわかった。古墳の築造時期を特定する遺物は出土していないが、周濠や葺石の様相から古墳時代前中期をさかのぼらないとみられている。



099 空から見た西ノ山古墳
下池山古墳のすぐ北側に隣接する



100 西ノ山古墳 周濠検出状況

画面左下が墳丘。墳丘裾から周濠中央にかけて葺石が見られる。周濠中央には排水のための小溝が古墳築造当初に掘られていた。

さんこせ 五合瀬古墳

佐保庄町に所在した円墳で、大和古墳群の北側に隣接する位置にある。発掘調査の過程で新たに見つかった埋没古墳である。

県道建設に伴って平成 6 (1994) 年から開始された奈良県立橿原考古学研究所による発掘調査の過程で、墳丘が削平され周濠のみ残る小規模な古墳が見いだされ、小字名から五合瀬古墳と命名された。

調査では弧状に巡る周濠が確認され、周濠内から完全に近い円筒埴輪 40 個体以上、形象埴輪、土師器、須恵器、製塩土器などが出土した。周濠の形態や周辺地形から、見つかった古墳は直径約 15 m の円墳である可能性が高いとみられ、古墳時代中期末の築造と想定されている。



101 五合瀬古墳 周濠検出状況
馬蹄穴から埴輪が多く出土

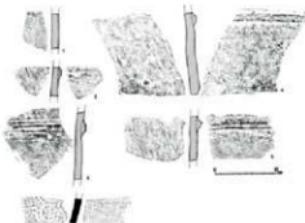


102 五合瀬古墳 墓輪

円筒埴輪のほか、蓋、家、鳥、人物の埴輪が見つかっている。

にしやまづか 西山塚古墳

萱生町に所在する前方後円墳である。前期古墳が大半を占める大和古墳群では、唯一の後期の大型前方後円墳とされている。現状では全長114m、後円部の高さ13mである。周囲を囲む幅12~20mの溜池は周濠の痕跡と考えられる。墳丘上から古墳時代後期前半の埴輪が採集されている。



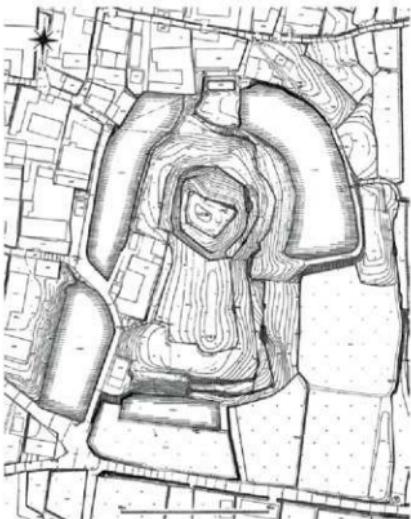
103 西山塚古墳 採集された埴輪・須恵器
西側くびれ部及び西側外堤部で採集された埴輪・須恵器の実測図。古墳時代後期の特徴を示している。

手白香皇女の墓

繼体天皇は6世紀初めの天皇（大王）である。『日本書紀』によると、後継者のなかつた武烈天皇の没後、応神天皇の五世孫にあたる男大迹王（繼体天皇）が越前三國より迎え入れられた。繼体は西暦507年に河内にて即位、526年（一説には513年）に大和（磐余玉穗宮）に入り、531年（一説には534年）に没した。繼体は仁賢天皇の娘である手白香皇女を皇后とし、手白香は後の欽明天皇の母となった。

『延喜諸陵寮式』は手白香の墓を「森田墓」とし、「在大和国山辺郡」「兆域東西二町南北二町」と記す。宮内庁は大和古墳群の西殿塚古墳を「手白香皇女衾田陵」に治定するが、西殿塚古墳は古墳時代前期前半に比定され、繼体や手白香とは年代が合わない。

大和古墳群中で候補となりうるのが西殿塚古墳の北西約300mの地点に所在する西山塚古墳である。西山塚古墳で採集された埴輪は6世紀前半の特徴を示しており、手白香皇女の墓とする見方の有力な根拠となっている。



104 西山塚古墳 墳丘測量図

大和古墳群の中では唯一前方部を北に向いている。埋葬施設は明らかになっていないが、『山辺郡誌』は明治年間に石棺が出土したことを探している。



105 空から見た西山塚古墳



106 空から見た西山塚古墳・西殿塚古墳

柳本飛行場と大和・柳本古墳群

大和・柳本古墳群とその周辺は太平洋戦争により大きな影響を受けた。なかでも特筆すべき存在が大和海軍航空隊である。大和海軍航空隊は昭和20(1945)年2月11日に開隊したとされ、その根拠地であった通称柳本飛行場は旧朝和村域を中心とする広大な敷地を有していた。戦局が悪化するにつれ、本土決戦を想定した多様な施設が飛行場周辺に急速に整備され、その一部は飛行場の東側にあった大和・柳本古墳群周辺にも及んだ(p.6 写真013)。

近年の発掘調査において戦時中の遺構が発見される事例が増加しつつある。大和古墳群では下池山古墳の後方部墳頂にて通信施設が見つかった。中山大塚古墳でも東側くびれ部付近で「横穴」がみつかり、兵器庫であった可能性が指摘されている。ノムギ古墳では後方部中央に木製壁板・床板を備えた横穴状空間が作られていた。ヒエ塚古墳では墳丘北側の調

査で防空壕の可能性が高い大型の遺構が見つかっている。柳本古墳群でも、櫛山古墳に海軍が物資貯蔵庫を建てたことが戦後間もない時期の発掘調査の契機となったことは周知の事実である。西方の唐古・鍵遺跡には高射砲陣地の遺構が残されている。

大和・柳本古墳群からみて西側にあたる柳本飛行場本体の敷地でも、建設時に全域の地形を整地したため、いくつかの小古墳が破壊された。昭和19~20(1944~45)年の飛行場建設時に文化財調査を担当した島田暁氏の報告によると、影響を受けたのは一本木塚・荒墓・ハギ塚の各古墳で、一本木塚古墳は封土を取り除くため爆破されたと記述されている。また、当時敷地の東側で回収されたという盾形埴輪が権原考古学研究所附属博物館に今も残されている。正確な出土地は不確かであるが、古墳時代中期の特徴を示し、当地周辺では稀有な事例である。

戦時中の切迫した状況下で文化財調査の努力が続けられていたことも記憶されなければならない。



107 ノムギ古墳 横穴状の空間

後方部中央に掘られていた横穴上の空間には鉄製の丸釘を打ち付けた木製壁板・床板が備えられていた。



108 ヒエ塚古墳 前方部北側の防空壕
前方部北側の周濠上に掘られていた防空壕と思われる遺構。長さ10.6m。半地下式の構造で、コの字の平面形を有する。



109 柳本飛行場 盾形埴輪

柳本飛行場の東側から出土したとされる盾形埴輪。盾の高さ85.6cm。詳しい出土場所は伝わっていないが、未知の古墳に由来する可能性もある。

柳本古墳群とその周辺

柳本古墳群は大和古墳群から谷を隔てて南方に展開し、大王墳と目される行燈山古墳（崇神天皇陵）、渋谷向山古墳（景行天皇陵）の2基の巨大前方後円墳と周辺の大型前方後円墳などにより構成される。

古墳群の中央付近に西門川が流れ地形を二分している。西門川北側の尾根上に立地する柳本支群は行燈山古墳（長さ 242 m）を筆頭とし、双方中円墳の櫛山古墳、23 面の銅鏡を「木櫃」に納めていた大和天神山古墳、竪穴式石室より三角縁神獸鏡 33 面と画文帝神獸鏡 1 面が発見された黒塚古墳を含んでいる。南側の尾根上に位置する渋谷支群は古墳時代前期最大の渋谷向山古墳（長さ 300 m）を盟主とし、上の山古墳・シウロウ塚古墳などの前方後円墳を含んでいる。このほか、西方の上ツ道沿いにも大型内行花文鏡が出土した柳本大塚古墳など 3 基の古墳が点在する。

柳本古墳群の造墓活動が終焉を迎えた後には、巨大前方後円墳築造による大王墳の系譜は大和東南部から姿を消し、同じころから大和西北部（佐紀地域）の佐紀古墳群が本格的に形成されていく。

110 南から見た柳本古墳群・大和古墳群
龍王山麓に広がる柳本古墳群と大和古墳群。写真左を南北一直線に走る道は後世の上ツ道である。



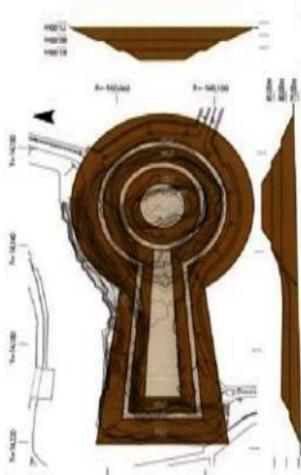
くろづか 黒塚古墳

柳本町に所在する前方後円墳である。墳丘の主軸を東西に置き前方部を西に向いている。

墳丘 現状で全長約 130 m、後円部直径約 72 m、高さ約 11 m である。墳丘は後世の改変による影響を大きく受けている。

埋葬施設 平成 9（1997）年から実施された発掘調査では、後円部中央において主軸に直交する南北方向の竪穴式石室が見つかった。竪穴式石室は内法が南北長約 8.3 m、北小口幅約 1.3 m、南小口幅約 0.9 m、高さ約 1.7 m の規模である。全国有数の規模の石室であり、墳丘の規模と比較しても長大な石室である。石室の構造は、下部の 3～4 段は人頭大の川原石を積み上げ、その上部に扁平な板石を天井まで持ち送りながら積み上げている。壁面は断面が三角形を呈する合掌式の竪穴式石室である。

石室内には南北長さ約 6.2 m、幅約 1 m の粘土で作られた棺台が置かれていた。この棺台の断面形が U 字形になっていることから、本来は割竹形木棺が据えられていたことがわかる。木棺はクワ製であったことが判明している。中央部には鮮明な朱色を呈する部分があり、水銀朱が付着している。被葬者の埋葬された空間を示すと考えられている。



113 黒塚古墳 墳丘測量図・復元図

黒塚古墳は中世以降に城郭として利用されたため、現況は大きく改変されている。調査の結果、本来の墳丘は後円部 3 段、前方部 2 段と推定されている。復元全長は約 134 m である。墳丘はほとんど盛土で築造されていた。



111 空から見た史跡整備後の黒塚古墳

黒塚古墳は柳本公園の中にある。国史跡に指定され、自由に見学できるよう整備されている。左は黒塚古墳展示館。



遺物 石室内の遺物は奇跡的に盗掘を免れ、埋葬当時の姿をとどめたまま出土した。見つかった鏡 34 面のうち、33 面が三角縁神獣鏡、1 面が画文帯神獣鏡であった。両者は副葬品としての扱われ方が異なっていたらしく、画文帯神獣鏡は木棺内に納められていたが、三角縁神獣鏡はすべて棺の外に置かれていた。このほかにも多種多様な鉄製品が出土している。

112 黒塚古墳 北から見た竪穴式石室

右室は発掘後に発生した地震により崩壊していることによって、外付の側面は盗掘を免れた。



114 黒塚古墳 上から見た豎穴式石室

石室内に削詰した石材を取り除いたところ、下か北側壁上位の石材が石室内に残壊していたが、床面の副葬品はほぼ完全な状態で残っていた。これほどの副葬品をもつるほど未密施設の豎穴式石室が正式な角毎測定で記録されたことは、稀有な事例といえる。



116 北棺外の副葬品

東西約1.1m、南北約0.7m程度の礫敷きの空間があり、三角縁神獸鏡1面、刺突具2点、U字形鉄製品1点が出土した。



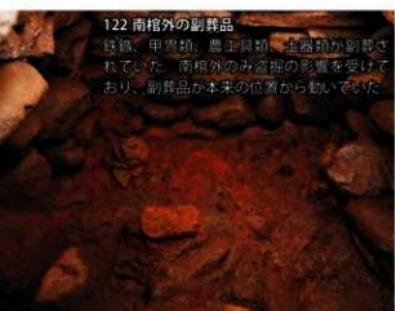
118 棺内の副葬品

棺内は中央部の長さ約2.7m、幅0.45mの範囲が割り込まれて遺体を安置する空間（棺室）になっていた。棺室からは画文帯神獸鏡1面、直刀・剣・槍が各1点出土した。



120 西棺外の副葬品

三角縁神獸鏡17面、素環頭大刀2点、直刀10点、剣1点、槍7点、鉄鎌86点、刺突具1点などが出土。



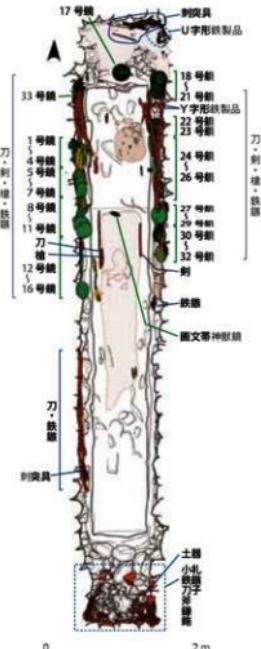
122 南棺外の副葬品

鍼簾、甲冑類、農工具類、土器類が副葬されていた。南棺外のみ盗掘の影響を受けており、副葬品が本来の位置から動いていた。



117 U字形鉄製品

大小2本のU字形の鉄棒に、鉄製の管状の部品21点を紐で結び付けた、類例のない出土品。繩物を中心とした有機質の部材と組み合わせた骨組みと考えられ、一種の旗のようなものか。



115 黒塚古墳 穹穴式石室の副葬品配置



119 Y字形鉄製品

Y字形鉄製品は2点まとめて置かれていた。類例は全国でも数点に限られる。円盤部の円孔の周囲にリボン状の纏物が付着しており、基部には木製の柄が付いていたようだ。



121 東棺外の副葬品

三角縁神獸鏡15面、素環頭大刀1点、直刀3点、剣1点、槍6点、鉄鎌126点、Y字形鉄製品2点などが出土。



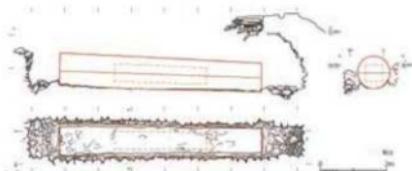
123 小札革縫合の復元品

小札と呼ばれる小型の鉄板が1,111点以上出土している。盗掘の影響で断片化しているが、本来は鉄製の小札を革で縫じた甲と冑が副葬されていたらしい。写真右は復元品。



124 黒塚古墳 石室床面の出土状況

粘土棺床を北から見た写真。棺床中央のとくに赤く染まった範囲は、遺体が安置されたところである。この部分からは画文帶神獸鏡1面が文様面を南に向け、立った状態で出土した。



125 黒塚古墳 割竹形木棺復元図

粘土棺床の形状等から推定される割竹形木棺の復元図。石室内側の大部分を木棺が占める。三角縁神獸鏡はもともと割竹形木棺の蓋上に置かれていたが、石室外からの土の流入と木棺そのものの腐朽により床面に落下した状態で発見された。



126 黒塚古墳 画文蒂神獸鏡

直径13.5cm。棺内の頭部付近に文様を南に向け立った状態で出土した。棺外の三角縁神獸鏡とは異なる特別な扱いを受けていたらしい。この鏡式は中国の後漢末から三国時代にかけて盛んに製作され、日本列島にもたらされた。三人の神仙のうち、両手の指をたくし上げて膝に琴を置いているのが、琴の名手である伯牙とみられる。左右の神仙は東王父と西王母であろう。文様の外側には「吾作明鏡自有紀□□公宣子」の銘文がある。

127 黒塚古墳 出土鏡群

三角縁神獸鏡33面、画文帶神獸鏡1面が出土。一つの古墳から出土した三角縁神獸鏡としては現在もなお国内最多数を誇っている。





128 黒塚古墳 三角縁唐草文帯四神四獸鏡（24号鏡）

三角縁神獸鏡は中国の神話に登場する神仙や靈獸を表現した銅鏡で、周縁部が三角形状に高く突出することから命名された。鏡の直径は平均 22cmあり、古墳時代の鏡としては大型である。

【三角縁神獸鏡の条件】（例外あり）

- ①直徑 20cmを超える大型品が多く、平均約 22cm
- ②縁の断面が三角形
- ③外区は内側から鑑齒文→複波文→鑑齒文
- ④内区外周に銘帯・散帶・唐草文帯・波文帯・鑑齒文帯・半円方形帯のいずれかを配置
- ⑤内区を 4 個ないし 6 個の乳で区分し、その間に神像と獸像を配置
- ⑥銘帯に施された銘文は七字句数種と四字句一種
- ⑦長方形の鈕孔を有する



129 黒塚古墳 三角縁神獸鏡の銘文

黒塚古墳の鏡には「銅出徐州」（3・22号鏡）、「同出徐州」（32号鏡）や「師出洛陽」（3号鏡）のように、中國大陸の地名が記されている。「徐州」は現在の山東省南部～江蘇省周辺にあたり、古来より銅の産地とされている。「師」は鏡つくりの工匠をさし、洛陽の都出身の優秀な工人が鏡を作ったことを誇るものである。



130 黒塚古墳 三角縁四神四獸鏡（22号鏡）

主文様の周囲に銘文を持つ。三角縁神獸鏡の銘文には鏡の出来の良さ、銅の產出地、文様（図像）の内容、鏡が持ち主にもたらす効能などがしばしば表現されている。



131 黒塚古墳 三角縁四神四獸鏡（7号鏡）

神像（東王父・西王母）は顔を正面に向け座った姿勢で、両手を膝の前で合わせ、衣の袂が大きく膨らんでいる。獸像は顔を正面に向けるが胴体は横向きである。周辺には「象」「駒」など、日本列島には存在しなかった動物も表現されている。



132 黒塚古墳 三角縁龍虎画像鏡（8号鏡）

8号鏡はこれまで兄弟鏡の存在が確認されていない鏡である。中央下の立姿の神像には、左上に「仙人」の文字が配されている。右側の獸像は鱗と髭の表現を持つ龍、左側の獸像は獸毛の表現を持つ虎である。

やまとてんじんやま 大和天神山古墳

柳本町に所在する前方後円墳で、行燈山古墳の西側に位置する。東側半分は現在の国道 169 号線建設時に破壊され、西側半分のみ埴丘が残存している。埴丘は全て伊射奈岐神社の境内地となっている。

埴丘 墓丘は形状がかなり損なわれているが、全長 103 m、後円部径 56 m に復元することができる。周濠の有無はわかつておらず、埴丘には葺石が認められるが、埴輪は出土していない。

埋葬施設 昭和 35 (1960) 年、道路建設に先立つて奈良県立橿原考古学研究所が後円部の竪穴式石室の調査をおこなった。竪穴式石室は全長約 6.1 m で、板石を用いた合掌式の石室である。石室内部には粘土で作られた棺台の上にコウヤマキ製の「木櫃」が安置されており、銅鏡 23 面や鉄製品等の副葬品が多量に出土した。木棺中央には 41kg に及ぶ朱が置かれ、その周囲に銅鏡が配置されていた。



135 大和天神山古墳 竪穴式石室
朱で赤く染まった「木櫃」と多数の銅鏡が見える。銅鏡は「木櫃」の内側縁辺に鏡面を上向きにして 20 面配置されており、さらに外側にも 3 面置かれていた。「木櫃」には人体埋葬がなかった可能性が指摘されている。



133 大和天神山古墳 墓丘測量図

道路(現国道 169 号線)建設により埴丘の東半分が破壊されている。国道の東側にはかつて埴丘の東側をかすめていた小道の痕跡が残っている。



134 空から見た大和天神山古墳

大和天神山古墳の東側は国道 169 線により削られ、西側には伊射奈岐神社の社殿が建てられている。アンド山古墳・南アンド山古墳は崇神天皇陵の陪冢として宮内庁が管理している。



136 道路建設前の大和天神山古墳

道路建設で埴丘東半が削り取られる前の貴重な写真。右端は南アンド山古墳。



137 大和天神山古墳 出土鏡群

黒塚古墳出土鏡群の発見まで柳本古墳群最多の出土数を誇っていた。典型的な三角線神獸鏡を含まず、方格規矩鏡や内行花纹鏡等を主体としている。(縮尺不眞)
CoLabBase(<http://colbase.nich.go.jp>)

あんどうやま 行燈山古墳

柳本町に所在し、龍王山から西に延びる尾根の一つを利用して築かれた前方後円墳である。現在は「崇神天皇山邊道勾岡上陵」として宮内庁により管理され、アンド山古墳・南アンド山古墳を含む周辺の古墳4基が陪冢に指定されている。

全長 242 m、後円部径 158 m、前方部幅約 100 m を測り、前方部を北西に向いている。柳本古墳群では渋谷向山古墳（景行天皇陵）に次ぐ規模の巨大前方後円墳である。墳丘は後円部、前方部ともに 3 段築成と考えられている。周濠は 3ヶ所の渡堤によって区切れ、前方部側は高い外堤によって囲まれている。これは江戸時代末に柳本藩がおこなった修陵事業によるもので、古墳築造当時の姿とは異なるものになっている。昭和 49 ~ 50（1974 ~ 75）年には宮内庁書陵部が外堤・渡堤・後円部墳丘裾の発掘調査をおこない、埴輪や土器が見つかっている。



138 行燈山古墳 墳丘測量図

現状では満々と水をたたえた幅の広い周濠が巡るが、これは江戸時代末期の修陵事業によるものである。墳丘は 3 段築成だが、古墳自体が傾斜地に造られているため、後円部の 3 段は前方部の各段にはつながらない。



139 行燈山古墳 横円筒埴輪

幅 18cm の横円筒埴輪の口縁部の破片。外堤裾付近で見つかっている。



140 行燈山古墳 小型丸底壺

高さ 8 cm の小型丸底壺。後円部東側の外堤の葺石直上で出土した。

141 空から見た行燈山古墳

南西上空から行燈山古墳とその周辺を望む。行燈山古墳と周辺の古墳は谷と谷に挟まれた稜線上に築かれている。



「崇神天皇陵」(行燈山古墳)の修陵事業

江戸時代には数次にわたって天皇陵の探索と修陵がおこなわれたが、なかでも最大規模となったのが幕末の「文久の修陵」である。

宇都宮藩の建議を採用した幕府が強力に推進した「文久の修陵」(1862~65)では、各地の陵墓の兆域(豊當)を定め、墳丘や周濠を当時考えられていた古制(古い時)に戻し、拝所(事奉者が祭祀をあなう場所)を設置することが求められた。こうした修陵により各地の陵墓は大きく変貌し、自由な立ち入りを阻むことにより周辺住民との関わりも変質していった。

柳本藩は元治元年(1864)2月16日に山陵奉行に御陵修補を出願し、工事を直接担当することを特別に認められた。同年9月から約7ヶ月の突貫工事により周濠の開削や堤防の拡張をおこなった。竣工後は周濠の「隣水」(濠の)の用水権を確保し、御陵の「隣水」は柳本村民にとっても重要な水源となつた。



「荒蘿」図
着手前の絵図。「山陵図」の成立は行燈山古墳が崇神天皇陵に治定(慶応元年(1865))された後であるため、「崇神帝」と記載されている。



「成功」図
竣工後の絵図。もともと区切られていた前方部周辺の池を一つにし、堤防も大きく嵩上げしていることがわかる。

142 「崇神天皇陵」の「荒蘿」「成功」図
「文久の修陵」の最終報告にあたる「山陵図」。
現在私たちが目にする陵墓の姿は、幕末に
大きく改変されたものであることが分かる。

行燈山古墳の銅板

元治元年(1864)9月に始まった行燈山古墳の修陵事業が終盤を迎えた元治2年(1865)4月3日、特異な大型銅板が出土した。この銅板はいま所在が分からなくなっているが、地元に拓本が残されている。銅板(70cm×53.9cm)の片面には内行花文鏡と共に通する文様を持ち、国内各地の大形倭製鏡とも関連する可能性がある。

柳本藩の工事記録の考証から、銅板は後円部南側の周濠内の掘削時に出土したものらしい。周濠内に何らかの特別な施設があって、古墳築造当時に意図的に埋納したものが出土した可能性もある。

このような大型銅板は、これまで津堂城山古墳(吉井古墳群)での出土例が知られるに過ぎなかつたが、富雄丸山古墳(奈良市)において「盾形銅鏡」が最近発見され話題を呼んだ。いずれも出土古墳が4世紀代の巨大古墳で、倭製鏡に関連する意匠を有する点でも共通しており、関連が注目される。



143 行燈山古墳の銅板復元品
拓本をもとに復元されたもの。片面には内行花文鏡に類似する文様があり、もう片面には四つの区画のなかに長方形と同心円が二重線で表現されている。

くしやま 柳山古墳

行燈山古墳のすぐ東側に立地する全長約155mの古墳で、通常の前方後円墳に短い方形部（造り出し）を付加したような特異な形状から、双方中円墳とも呼ばれている。

昭和23（1948）年から奈良県教育委員会が実施した発掘調査では、後円部（中円部）の墳頂から竪穴式石室と石棺の一部が見つかり、腕輪形石製品や合子・盤・壺形などの滑石製品、鉄製品などが出土した。また、東側の方形部頂上の平坦面では白蝶貝を敷いた特殊な遺構（特殊施設）が見つかった。また、昭和63（1988）年度に前方部北側で実施された発掘調査では、前方部を区画する堀割と外堤状の遺構が検出され、口縁を鋸歯状に整形した柵形埴輪がまとめて出土した。

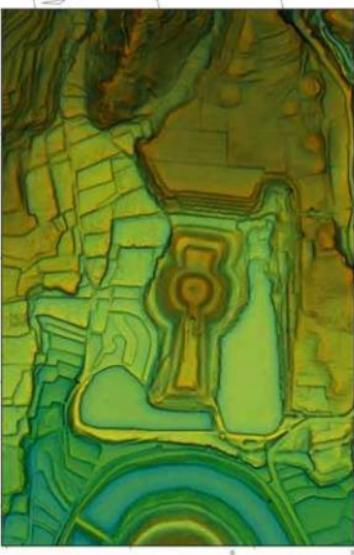
さらに、平成9（1997）年度には天理市教育委員会が前方部南西側の池渡堤の護岸工事に伴う発掘調査をおこない、池内から前方部の基底部の葺石と埴輪列を検出した。また、墳丘基底部よりさらに下段にも墳丘を構成する斜面があることがわかった。

柳山古墳から出土した埴輪には円筒埴輪に加えて草創期の家形埴輪や各種の器財埴輪（蓋形埴輪・盾形埴輪など）を含んでおり、古墳時代前期後半以降に定型化していく多様な埴輪による祭式の最も初期の姿を示している。



144 空から見た柳山古墳

柳山古墳は墳丘上を自由に見学できる国指定史跡である。現在の山辺の道（東海自然歩道）は、写真中央の柳山古墳と写真左の行燈山古墳の間を通っている。



145 柳山古墳 地形起伏図

航空レーザ測量で取得した3次元データ。墳丘の段築が良好に残っており、起伏図にも明瞭に現れている。



146 柳山古墳 墳丘周辺測量図

柳山古墳東方の尾根上をみると墳丘主軸の延長上に人为的と思われる広大な平坦面が広がっており、柳山古墳との関連が注目される。



147 柳山古墳 穹穴式石室

後内部（中内部）の中央に残存していた竪穴式石室。長さ 7.1 m、幅 1.4 m。床面には長さ 4.6 m、幅 1.2 m の長方形の窪みがあり、壁が詰められていたという。写真右には出土した組合式長持形石棺の一部が写っている。



149 柳山古墳 横円筒埴輪と柵形埴輪

横円筒埴輪（写真左下）は後内部（中内部）埴頂を囲うように並べられていた。柵形埴輪（写真右上）は前方部北側から出土したもので、横円筒埴輪の口縁部を鋸歯状に整形している。



148 柳山古墳 特殊遺構

造り出し（後方部）で見つかった東西 3.4 m、南北 5 m 以上の規模を有する特殊な遺構。垂直に掘り下げた区画に多量の白磚が詰められていた。



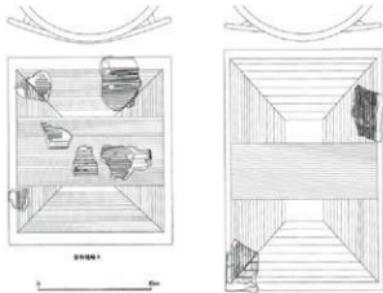
150 柳山古墳 各種の石製品

柳山古墳からの出土数は石剣 113、車輪石 106、鍬形石 23、石製剣 3 で、石剣・車輪石は今のところ最多数を誇る。このほか、合子・盤などの滑石製品も見つかっている。



151 柳山古墳

前方部南側の墓石・埴輪列
天理市教育委員会の調査で見つかった。写真左が前方部、奥が後内部である。写真右下は前方部の南西隅角にあたり、埴輪列がほぼ直角に屈曲する様子が分かる。



152 柳山古墳 盾形埴輪の復元案

最近の研究で提示された盾形埴輪の復元案。柳山古墳の盾形埴輪は最古級に位置づけられる。

しづたにむかいやま 渋谷向山古墳

渋谷町に所在し、龍王山から西に延びる尾根の一つを利用して築かれた前方後円墳である。現在は「景行天皇山邊道上陵」として宮内庁により管理され、上の山古墳を含む周辺古墳3基が陪冢に指定されている。

墳丘 全長約300m、後円部径約168m、前方部幅約170mを測り、前方部を西に向いている。古墳時代前期に築造されたものとしては国内最大の古墳である。

昭和46(1971)年以降、宮内庁書陵部により墳丘裾と渡堤の発掘調査が数次にわたって実施されている。近年の調査により、墳丘の形状は後円部4段築成、前方部3段築成であった可能性が高まった。後円部1段目の南側には方形の突出部があり、造り出しが考えられている。また、周濠は後円部側6ヶ所、前方部側4ヶ所の渡堤によって階段状に区切られているが、現在の状況は水利目的により改修された姿である。

遺物 これまでの宮内庁書陵部の調査等により普通円筒埴輪、鰐付円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪(蓋、盾、鞍など)が確認されている。鰐付円筒埴輪は限定された場所で使われていたらしく、後円部北側斜面で見つかった埴輪列では、普通円筒埴輪のみが並べられていた。



154 渋谷向山古墳 墳丘測量図

前方部の南側には幕末の修陵まで観音堂が存在したため、地形の変更により本来の形状が失われている。



155 渋谷向山古墳 後円部北側斜面の円筒埴輪列

平成27(2015)年に後円部北側斜面で宮内庁書陵部が実施した発掘調査では、第2段斜面裾の平坦面で碌敷と円筒埴輪列が確認された。平坦面を盛土造成しながら円筒埴輪を配置したと考えられ、調査区内から5個体が出土した。



153 空から見た渋谷向山古墳・上の山古墳

渋谷向山古墳・上の山古墳を北から望む。上の山古墳は景行天皇陵の陪冢として宮内庁が管理している。写真左端は山辺の道が通過している。



156 渋谷向山古墳 円筒埴輪

見つかった円筒埴輪はいずれも直径30cm程度で、朝顔形埴輪も含まれていた可能性が高い。



157 渋谷向山古墳 さわやか
蓋形埴輪
後円部の頂上で採集された蓋形埴輪の立飾の破片。飾板に線刻を伴っている。



158 渋谷向山古墳 盾形埴輪
後円部頂上で採集された盾面の破片。外区に直弧文、内区に横方向の線刻がある。

伝渋谷出土の石枕

天理市渋谷から出土したと伝えられる石枕が関西大学博物館に所蔵されている。この石枕をはじめて世に紹介した洋学者の神田孝平（1830-1898）は「元治元年（1864）六月十一日大和国式上郡渋谷村の田地より堀出したりと云伝ふる石器なり」と記す。のちに渋谷向山古墳出土として学界に紹介されたこともあるがこれは確実とは言えず、あくまで渋谷村の田地出土と伝えられる資料である。

全長 31.7cm、幅 31.8cm、高さ 13.1cm の石枕岩製で、上面に頭部を載せるための窪みがある。



159 伝渋谷出土 石枕
関西大学が所蔵する本山コレクションの資料。出土の経緯については問題を残すものの、本資料が前期古墳に埋納されたものであった可能性は高い。

伝渋谷出土の三角縁神獸鏡

天理市渋谷から出土したと伝えられる三角縁神獸鏡が存在する。東洋史学者であった神田喜一郎（1897-1984）の旧蔵品で、神田が館長を務めた京都国立博物館に現在所蔵されている。本鏡と同一の鏡と思われる拓影が19世紀前半に制作された『鏡研鑽本』と呼ばれる古冊子に収録されており、このころには存在が知られていたことがわかる。

本鏡を納めた箱書きには「和州城上郡渋谷村 崇神陵近傍」の記載があるが、現在とは異なり19世紀前半頃は渋谷向山古墳が崇神天皇陵と考証されていた時期である（p.51参照）。このことから、「渋谷村 崇神陵近傍」という記載は「渋谷向山古墳近傍」と読み替えることもできる。

19世紀は各地で陵墓の盗掘が横行していた時期である。本鏡と渋谷向山古墳の関係はわからないが、興味深い資料であることは確かである。



160 伝渋谷出土 三角縁複文帯三神二獸一爐鏡
京都国立博物館所蔵。面径 21.6cm。いわゆる波文帶鏡群に属し、船載三角縁神獸鏡としては最新段階のものとされる。波文帶鏡群は古墳時代前期後半に流通したもので、黒塚古墳以降も三角縁神獸鏡が柳本古墳群に供給されていたことを示す資料と言える。

画像 : ColBase(<http://colbase.nich.go.jp>)

すじんてんてんのうりょう 「崇神天皇陵」と「景行天皇陵」

現在、宮内庁は柳本町の行燈山古墳を「崇神天皇山邊道勾岡上陵」、渋谷町の渋谷向山古墳を「景行天皇山邊道上陵」に治定（陵墓の被葬者）しているが、江戸時代後半には現在とは反対に考証されていたことが知られている。

元禄年間の山陵調査では、現在の天理市上総町にある御墓山古墳が景行天皇陵にあたると報告されていたが、その後江戸時代後半にかけては渋谷向山古墳＝崇神天皇陵、行燈山古墳＝景行天皇陵とする見方が定説化していた。こうした見方に異を唱えたのが国学者の谷森善臣（1818-1911）で、安政4年（1857）には地名や地勢の考証により従来の説を否定する考えを示した（『蘭豆のしづく』）。

その後、宇都宮藩の建議により幕府が強力に推進した「文久の修陵」（1862～65）では、陵墓の考証作業において谷森が中心的な役割を担った。結果として、修陵の最終局面にあたる慶応元年（1865）に渋谷向山古墳を景行天皇陵、行燈山古墳を崇神天皇陵とする治定が確定した。

161 「崇神天皇陵」と「景行天皇陵」の変遷

	崇神天皇山邊道勾岡上陵	景行天皇山邊道上陵
「延喜諸陵式」	10世紀	大和國城上郡
元禄の「山陵」調査	元禄10年（1697）	「其跡もさだからならず」 山邊道上総村 王墓山
並河城所『大和志』	享保2年（1717）	「渋谷村ノ南」 「柳本村ノ東」
五條代官「申渡書」	寛政10年（1798）	渋谷村「向山」
瀬谷君平『山鹿記』	文化5年（1808）	渋谷村「向山」 柳本村「忍代山」
北浦定政『打墨鏡』	嘉永元年（1848）	渋谷村の東南「向山」 柳本村の東「御崎山」
谷森善臣『蘭豆のしづく』	安政4年（1857）	柳本村「ミサンサイ」 渋谷村「向山」
渋谷町文書	元治2年（1865）	「崇神天皇陵御陵」
「文久の修陵」	文久2年（1862） 慶応元年（1865） 〔測量〕	〔渋谷向山古墳〕 〔行燈山古墳〕 〔行燈山古墳〕 〔渋谷向山古墳〕
谷森善臣『山鹿考』	慶応3年（1867）	柳本村「ニサンサイ」 渋谷村「向山」
現在の陵墓治定	柳本町 行燈山古墳	渋谷町 渋谷向山古墳

谷山正道氏の研究（谷山2016）をもとに構成



162 空から見た「崇神天皇陵」と「景行天皇陵」

「山邊道」を冠する二つの陵の距離は約800mほどに過ぎない。10世紀に成立した「延喜諸陵式」は、所在地をいわゆる「大和國城上郡」とするのみである。



163 空から見た御墓山古墳（王墓山古墳）

天理市上総町にある長さ約74mの前方後円墳。市教育委員会の発掘調査により6世紀代の古墳であることが判明している。元禄の「山陵」調査では山邊郡内に所在するにもかかわらず景行天皇陵と報告されたが、これは確たる裏付けを欠くものであった。

うえ やまと 上の山古墳

渋谷向山古墳のすぐ北側に隣接する古墳である。長さ144mの前方後円墳で、東西方向に主軸を取る渋谷向山古墳とは異なって、上の山古墳の主軸は南北方向を向く。

平成6（1994）年に奈良県立橿原考古学研究所が前方部西側の水田を発掘調査したところ、墳丘を巡る幅28m前後の周濠が確認された。周濠の外堤には葺石が施されており、周濠内からは多量の埴輪が出土した。このほか縦173cm、横61cm、厚さ5cmの大型の板材が出土しており、盾を意識して製作された可能性が高い木製品である。



164 上の山古墳 墳丘測量図

墳丘の東側は裾部まで民家が立て込んでおり、大きく削平されている。墳丘の西側でおこなわれた発掘調査で周濠と外堤が見つかった。



165 空から見た上の山古墳

墳丘の大部分は景行天皇陵の陪冢として宮内庁が管理しているほか、西側くびれ部は神社の社地になっている。



166 上の山古墳 盾形の加工板材

ヒノキ科の木材を加工した板材。下部の先端は台形に尖らせてあり、下端から30cm程度を地面に埋めて、立てた状態で使用していたらしい。くびれ部の墳丘裾付近に盾のように立てられていた可能性が高く、後の盾持ち人物埴輪の出現を考えるうえでも重要な資料とされる。



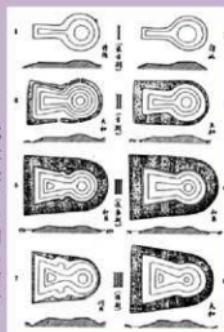
167 上の山古墳 脛付円筒埴輪

高さ102.5cm。口縁部から底部までのほぼ全形を知ることができる資料。5条の突帯が巡り、底部を除いた各段の高さがほぼ同一になるように作られている。

京都大学考古学研究室保管の陵墓模型

大正5（1916）年、京都帝国大学に日本最初の考古学講座を設置した濱田耕作（1881-1938）は、昭和11（1936）年に論文「前方後円墳の諸問題」を著して、前方後円墳の変遷を解明した。その過程で濱田が角田文衛ら研究室員を指揮して制作した模型（西殿塚古墳・行燈山古墳・渋谷向山古墳）が京都大学に残されている。制作時期は昭和11（1936）年7月である。いずれも宮内省の陵墓圖をもとに等高線に沿って切り出したケント紙を重ねて作ったもので、縮尺は1:1,000に統一されているが彩色は三者三様である。

我が国の考古学の黎明期を主導した京都大学考古学研究室でいち早く模型が制作されていた事実は、これらの古墳が学史上早くから重要視されていたことを物語る。



168 前方後円墳の変遷

濱田耕作は宮内省が作成した陵墓圖をもとに、近畿地方の標識的な前方後円墳の変遷を、最古期・古期・最盛期・後期の4期に区分し、前方後円墳の墳丘の変遷順を確立した。（濱田耕作 1936「前方後円墳の諸問題」『考古学雑誌』26-9）



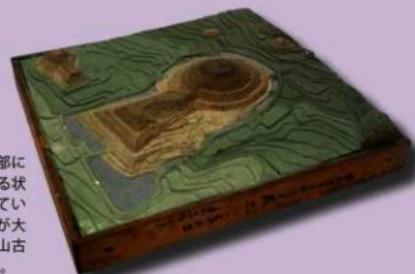
169 西殿塚古墳（手白香皇女衾田陵）模型

西に向かって下がる緩やかな斜面に墳丘が横たわる様子がよくわかる。前方部と後円部の頂点にある方形壇が認められるほか、前方部の拝所西側に入り込む窪地状の地形も表現されている。しかし、西殿塚古墳前方部の南東側に中山大塚古墳の南側から入り込む大きな谷は、制作の原図とした測量図の範囲外であったためか表現されていない。



170 行燈山古墳（崇神天皇陵）模型

垂直方向が誇張されている。行燈山古墳の東側（柳山古墳）から西側（アンド山古墳・南アンド山古墳・大和天神山古墳）までの高低差が実感的である。行燈山古墳の西側には昭和30年代に県道（現国道169号線）が整備され、大和天神山古墳の東半が破壊されるなど状況が一変したが、この模型は道路建設前の様子を伝えている。



171 渋谷向山古墳（景行天皇陵）模型

垂直方向が誇張されている。前方部から後内部にかけてテラスが途切れることなく連続している状況や、周濠が渡堤によって階段状に区切られていることがよくわかる。また、前方部南側斜面が大きく崩れている様子も表現されている。上の山古墳をはじめとして周辺の陪冢も表現されている。

シウロウ塚古墳

渋谷町にある古墳で、渋谷向山古墳のすぐ東側に隣接する赤坂古墳と接するように築かれている。

前方部を西に向ける前方後円墳とされているが、後円部と前方部の鞍部が低く、2基の古墳が連接したような特異な形状をしている。全長は120m前後、後円部径60m、前方部幅60mである。墳丘形態、埋葬施設や副葬品に関する知見はこれまでに得られておらず、築造時期など詳細は分かっていない。

なお、シウロウ塚古墳の北東方約400mの位置にあるヲカタ塚古墳は現状では長さ約55mの前方後円墳とされているが、周辺の地割〔p.5 地図012〕から長さ約130m以上の前方後円墳となる可能性も指摘されている。シウロウ塚古墳とともに今後の解明が待たれる古墳である。

173 シウロウ塚古墳 墳丘測量図

後円部と前方部の鞍部が堀割状に深くなっているため、2基の古墳が連接したような形状にも見える。



172 空から見たシウロウ塚古墳

シウロウ塚・赤坂・渋谷向山古墳が並ぶように築かれている。



いしなづか 石名塚古墳

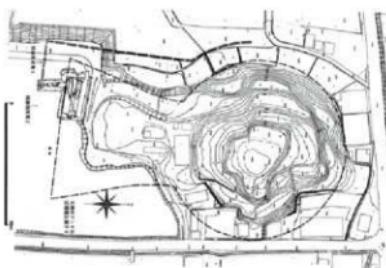
柳本町に所在する古墳で、上ツ道に平行するように並ぶ3基（石名塚古墳・柳本大塚古墳・ノベラ古墳）のうちの一つである。

前方部を南に向ける前方後円墳で、現状で長さ約111mである。平成15（2003）年に墳丘南側の池堤改修に伴う発掘調査を奈良県立橿原考古学研究所が実施した。この調査では前方部前端が池まで延びていることが判明し、前方部前面に基盤層を掘削した深さ0.7m以上の濠が存在することが確認された。墳丘西側の地割から周濠の存在が想定されている。



174 空から見た石名塚古墳

東から撮影した航空写真。写真下を左右に横断するのが後世の上ツ道である。



175 石名塚古墳 墳丘測量図

前方部に比べて後円部がかなり高い。墳丘は周囲から削られており、現状では不明点が多い。

やなぎもとおおつか 柳本大塚古墳

柳本町に所在する前方後円墳で、上ツ道に平行するように並ぶ3基の古墳のうちの一つである。

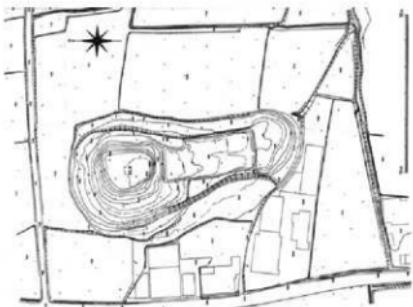
墳丘は前方部を南に向けた前方後円墳で、全長94mである。明治28~29(1895~96)年頃に後円部墳頂の竪穴式石室が発掘され、木棺材や若干の副葬品が出土した。また、大正7(1918)年には後円部で耕作中に竪穴式石室の北東部で小石室が見つかり、内部から大型の内行花文鏡が出土した。竪穴式石室とは別の空間に大型内行花文鏡を収めていた点は下池山古墳と共通する様相である。明治年間の盗掘時に聞き取られた記録では、竪穴式石室は内法長約4m、幅約1.7~2mで、天井石4枚を架けていたらしい。石室は盗掘時に破壊されたという。

竪穴式石室の発掘の際に出土した割竹形木棺は桜井市の宗教法人大神教本院の玄関額として利用されていることが近年報告された。木棺はコウヤマキの大径材(直径120cm以上)を使用していたことが分析により判明した。



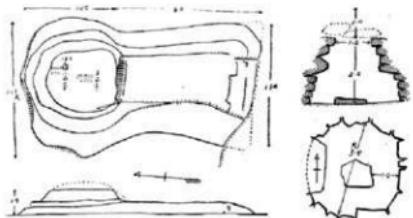
176 空から見た柳本大塚古墳

西から撮影した航空写真。写真下を左右に横断するのが後世の上ツ道である。



177 柳本大塚古墳 墳丘測量図

墳丘は改変が著しく、本来の形状は不明な点が多い。



(本森)圓形外塚大木柳

實室石小塚大木柳
(足利)圓

178 柳本大塚古墳 小石室実測図

梅原末治・森本六爾氏による調査報告では、小石室は直径がおよそ三尺五寸の円形で、扁平な石材を合掌式に積んでいた。床面中央に板石1枚があり、鏡はこの石の上に置かれていたといふ。



179 柳本大塚古墳 内行花文鏡

直径39.7cm。現在は宮内庁書陵部が所蔵。被葬者を納めた竪穴式石室の傍らに鏡のみを納める小石室を造ること、直径40cm近い大型鏡であることなど、下池山古墳の内行花文鏡とは共通点が多い。船載内行花文鏡の面影をよく残した、古墳時代後製鏡の初期段階のものと考えられている。

やなぎもと 柳本遺跡

柳本古墳群の西方、現在のJR柳本駅西側一帯に広がる集落遺跡である。弥生時代後期末頃から古墳時代前期初頭まで継続的に営まれた集落遺跡で、柳本古墳群造営の基盤となった可能性もある。

天理市教育委員会による第1・2次調査：四ノ坪地点では庄内期の土坑から多量の土器が出土している。第3次調査では、土坑や建物を区画する溝群が検出されている。また、第6次調査：大ナカ田地点では、庄内式前半期の前方後円形の周溝墓に復元可能な遺構が検出されるとともに、各地の外来系土器（東海・近江・吉備・北陸・北近畿系など）の出土が報告されている。



180 柳本遺跡第2次調査（四ノ坪地点）土坑SK7出土土器
JR柳本駅のすぐ西側でおこなわれた発掘調査で多量の遺物
が出土した。土坑SK7は庄内式末期の土坑。左から大和型
庄内彫、布留式傾向彫、近江系彫。

むかいやま 向山遺跡

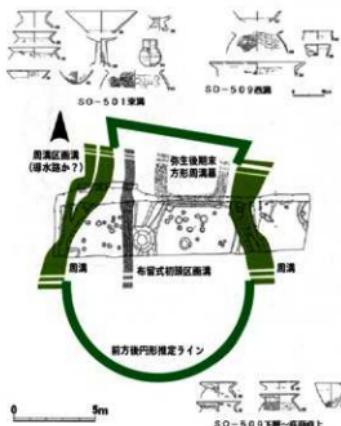
渋谷向山古墳のすぐ西側に所在する弥生時代後期末～古墳時代前期の集落遺跡である。平成4（1992）年度に天理市教育委員会が実施した小規模な発掘調査の際に、住居跡状の落ち込みが見つかった。

住居跡状の落ち込みでは、埋土中から甕、鉢、高杯などの布留式土器とともに緑色凝灰岩の剥片や碎片が出土している。落ち込み内の土坑とそれにつながる排水小溝や埋土中の石材等の存在から、この遺構は石製品製作に関わる工房跡として考えられている。



181 柳本遺跡大ナカ田地点 発掘調査風景

天理市教育委員会の調査により2条の対向する弧状の溝が検出された。



182 柳本遺跡大ナカ田地点 前方後円形周溝墓

2条の対向する弧状の溝（SO-501・SD-509）の底面直上に埋土下層から庄内式古相の土器が出土している。直径12m程度の円形周溝が想定されており、さらに調査区北側ではくびれ部状に屈曲していた。



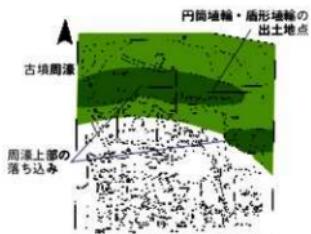
183 向山遺跡 石製品製作に関わる工房跡
古墳の副葬品に用いられた石製品や玉類を
製作していた可能性もある。

やなぎもとたちばな 柳本立花遺跡

柳本古墳群の中央部に位置する遺跡である。天理市教育委員会が平成12（2000）年におこなった発掘調査では、墳丘が削られて埋没した古墳の周濠の一部と思われる遺構が見つかった。

見つかった遺構は調査区北側を弧を描くように巡る深さ1mほどの溝で、古墳の形や規模は不明である。埋土には埴輪片や土師器片が多く含まれていたほか、腕輪形石製品（石剣）や鐵鎗など古墳の副葬品に由来する遺物も出土した。

古墳周濠と思われる遺構は古墳築造後100～150年程度で自然に埋まったようだが、そこを掘り返して円筒埴輪や盾形埴輪を人為的に埋めたとみられる遺構も見つかった。盾形埴輪は円筒の正面に長方形の盾面を貼り付けてつくったもので、盾面は目の字に三分割され、コの字と平行線、対角線の組み合わせで盾面が表現されている。これまでに知られている盾形埴輪のなかでは初期のもの一つである。



184 柳本立花遺跡第1次調査 平面図
発掘調査で見つかった規模不詳の埋没古墳。
盾形埴輪・円筒埴輪が出土した落ち込みは、
周濠埋没後に掘り込まれたもの。



185 柳本立花遺跡 石剣
埋没古墳の周濠埋土の上半
から出土した石剣の破片。
緑色凝灰岩製。



186 柳本立花遺跡 円筒埴輪・盾形埴輪の出土状況
円筒埴輪と盾形埴輪の破片がまとまって出土した。
周濠埋没後に二次的に埋められたらしい。



187 柳本立花遺跡
円筒埴輪・盾形埴輪
他の出土例も参考に円筒埴輪、
盾形埴輪の全形を推定復元した。
左の円筒埴輪は高さ約100cmで
方形の透孔が特徴。右の盾形埴
輪は推定高さ約155cmで、盾面
の大きさは横方向約78cm。透
孔は円形である。

令和 6 (2024) 年 1 月 20 日発行

**山辺の古墳文化
大和古墳群と柳本古墳群**

編集 天理市教育委員会
天理市川原城町 605

発行 天理市教育委員会

印刷 橋本印刷株式会社
葛城市竹内 365-1

OYAMATO Tumulus Group & YANAGIMOTO Tumulus Group



2024

Tenri City Board of Education